

エヴァ・ル・ガリエンヌのミュージカル劇  
*Alice in Wonderland*  
*Alice in Wonderland: a Musical Play by Eva Le Gallienne*

木下信一 Shinichi KINOSHITA

The stage of *Alice in Wonderland* adapted by Eva Le Gallienne (1899-1991), an actress and a producer, was first performed in December 1932 and got favourable reception. This stage consisted of *Alice's Adventures in Wonderland* and *Through the Looking-Glass. Alice in Wonderland*, the 1933 Paramount movie, was based on this stage (although uncredited). This stage re-appeared in 1947 and also got favourable reception. However, it resulted in a commercial failure. During this revival, an audio-drama by the original casts was recorded and 78rpm record sets were released in 1948. In 1955, this stage was arranged into a television-drama and gone on the air. And in 1982 this stage was revived at the third time but resulted in a failure. The production in 1982 was on the air in 1983 as the television-drama, with renewed casts and completely different interpretations. Except for the 1983 production, Le Gallienne had played as White Queen. And in all three stage productions, she 'flew' with wireworks. In this paper, how Le Gallienne's stage has been played and adapted is discussed, mainly based on the published plays and articles in *New York Times*.

## はじめに

キャロルの二つの『アリス』物語は、出版後現在に至るまで、さまざまなメディアで取り上げられ、移植されてきた。最も早い他メディアへの移植は、作者自身が発案し、サヴィル・クラーク (Henry Savile Clark; 1841-1893) により劇化された1886年のオペレッタであろう。キャロルの死後5年、1903年には、もう最初の映画版『不思議の国のアリス』が生まれている。現在では映画やテレビドラマにおける『アリス』が、他メディアへの移植例として一般的であるが、1951年、ウォルト・ディズニーのアニメーション映画『不思議の国のアリス』の成功と、その後のテレビ時代を経る前は、他メディアへの移植の主流は演劇であった。そして、現在に至るも『アリス』の劇化、上演は絶えることがない。

エヴァ・ル・ガリエンヌ (Eva Le Gallienne; 1899-1991) とフロリダ・フリーバス (Florida Friebus; 1909-1988) が執筆し、1932年に初演されたミュージカル劇 *Alice in Wonderland* は、初演後、二度の再演を果たし、一人の女優が初演50年後にも同じ役を演じたこと、派生するメディアへ進出したこと、そして後世の、『アリス』の他メディアへの移植に際して大きな影響を及ぼしたという点で、注目すべき演劇である。

本稿ではガリエンヌによるこの劇の内容を紹介し、その特色と後世への影響を論じ

る。その上で上演歴と他メディアへの進出を、主に *New York Times* の記事を用い、時間軸にそって記述したい。

## 『不思議の国のアリス』劇化まで

エヴァ・ル・ガリエヌは 1899 年、詩人リチャード・ル・ガリエヌの娘としてイギリスに生まれた。若くして渡米し、女優として活躍。1926 年には自分の劇団として *Civic Repertory Theatre* を設立する。後にアメリカ演劇界の大御所として尊敬を受けたガリエヌが初めて自分で持った劇団であった。1928 年には、*Peter Pan* を上演し、主演している。

ガリエヌは、『不思議の国のアリス』を劇化するという構想を早くから持っていたようで、1930 年には、このシーズンでの上演を発表していた<sup>1</sup>が、恐慌のあおりを受け、コストのかかるこの舞台は延期を余儀なくされた<sup>2</sup>。翌年、ガリエヌは一年の休養を取り、演劇から離れる。1931 年の 5 月には、すでに *Civic Repertory Theatre* 再開の際の演目として『不思議の国のアリス』の劇化が計画に入っていた。しかし、その年の 6 月 12 日、別荘にあったプロパンガスのボンベの爆発事故に巻き込まれてガリエヌは重傷を負う<sup>3</sup>。回復したガリエヌは 1931 年 10 月には、翌年アリスを演じることになるジョセフィン・ハッチンソン (*Josephine Hutchinson; 1903-1998*) とともに『不思議の国のアリス』の劇の準備にかかっている<sup>4</sup>。1932 年 9 月、ガリエヌの *Civic Repertory Theatre* への復帰が報じられた際、その年の 12 月 12 日から *Alice in Wonderland* の上演を行うことが報じられた<sup>5</sup>。この年、1932 年はキャロルの生誕百年にあたる。5 月にはアリス・ハーグリーブズ (旧姓リデル) がコロンビア大学の名誉学位をもらうためにニューヨークに来ている。1930 年の上演をやむなく延期したことと、一年間の休養とが重なった結果、偶然とはいえキャロル生誕百年に当て込んだ企画のようになってしまった。

新聞での予告通り、劇 *Alice in Wonderland* は 12 月 12 日、その幕を上げた。

## 舞台あらすじ

舞台は二幕構成で、第一幕が『不思議の国のアリス』、第二幕が『鏡の国のアリス』となっている。以下、大まかな筋を追いながら、原作との違いをしてみる<sup>i</sup>。舞台ということもあり、原作に出てくる詩は適宜省略あるいは短縮されているものも多いが、ここではそこまでの詳細に立ち入らない。

## 序曲

開幕前に、キャロルの詩を歌詞にした歌が流れる。通常考えられる *All in the golden afternoon....* の詩ではなく、『鏡の国のアリス』の巻末の詩 *A boat,....* の詩を短縮したものに曲をつけている。<sup>ii</sup>

---

<sup>i</sup> 1932 年版脚本、1933 年劇場パンフレット (*Playbill*)、巡業時プログラムより

<sup>ii</sup> 序曲については 1933 年劇場パンフレットにも 1932 年版脚本にも記載がない。しかし巡業

## 第一幕

### Alice at Home

椅子の上で丸まっていたアリスは暖炉の上にある鏡を抜ける。

### The Looking Glass House

鏡を抜けたアリスは、そこにある本の中の詩 Jabberwocky を読む。

### White Rabbit

白兔が登場。白兔を追いかけたアリスは小さなドアの前に出る。テーブルにある「Drink me」と書かれた札のついている瓶の中味を飲むとアリスは小さくなり、「Eat me」と書かれたケーキを食べると大きくなる。戻ってきた白兔は驚いて逃げる。兔の落として行った扇子を手にとると小さくなる。

### Pool of Tears

自分の涙でできた池に落ちたアリスは鼠に出会い、現れた他の動物ともども岸に上がる。

### Caucus Race

どうやって身体を乾かすか。鼠の「無味乾燥」な話、Caucus race と続き、鼠の「尾話」。鼠が去った後にアリスがダイナの話をして、他の動物まで去ってしまう。そこへ白兔が現れて、アリスに手袋と扇子を取ってくるよう命じる。

### Caterpillar

白兔と別れたアリスは青虫に出会う（白兔の家のエピソードはない）。茸の片側を食べると大きくなり、もう片側を食べると小さくなると言って青虫は去る。アリスが茸の両側から少し千切ったところで魚の伝令が登場する（アリスが茸で体長を調節するエピソードはない）。蛙の伝令との会話の後、アリスは公爵夫人の家に入る。

### Duchess

公爵夫人の家に入ったアリスは、赤ん坊を連れて家を出る。家を出たアリスは赤ん坊が豚になってしまったので地面に下ろすと豚は逃げて行く。

### Cheshire Cat

木の枝にいるチェシャ猫とアリスとの会話。

### Mad Tea Party

チェシャ猫が消えるとお茶会が始まっている。アリスもお茶会の席に着いて、気違いお茶会に参加する。

### Queen's Croquet Ground

お茶会を離れたアリスはスペードの 2,5,7 が白バラを赤く塗っているのに出会う（木の幹のドアからホールに入り、身体を調節して庭に出るエピソードはない）。その後ハートの女王たちとクロケット。アリスは公爵夫人に再会する（チェシャ猫が再登場す

---

プログラムに掲載されている二つの楽譜のうち、「Beautiful soup」の前に掲載されていること、1977 年版脚本では Overture として第一幕の前に出ていること、1947 年キャストによるレコード録音で、冒頭に録音されていることから、1932 年も序曲として位置づけられていたと判断した。

る場面はない)。公爵夫人を追い払ったハートの女王にアリスはグリフォンを紹介され、グリフォンとアリスは海亀フーの所へ行く。

### **By the Sea**

海亀フーとグリフォンによる海の底の学校の話、ロブスターのカドリアル、スープの歌。気がつくとアリスはグリフォンと一緒に法廷にいた。

### **The Trial**

ハートのジャックの裁判。開廷前にアリスとハートの王の間で、原作『鏡の国のアリス』の白の王との「I see nobody」のやりとりと「I love my love with an H」のやりとりが行われる。アングロサクソンの使者（原作のヘア）の役を、舞台では三月兎が演じる。帽子屋と料理人、二人の証人の後、アリスが証人として呼び出されることはないが、原作同様にハートの王たちとのやりとりが行われる。最後、ハートの女王や法廷の面々に「首を斬れ！」と言われ、アリスは「あんたたちなんか、トランプじゃない！」と言う。最後ハートの女王が「首を斬れ！ 首を斬れ！」と言い、アリスは逃げ出す。

## **第二幕**

### **Red Chess Queen**

法廷から逃げてきたアリスは、チェスのゲームに参加することとなる。

### **Railway Carriage**

赤の女王と別れたアリスは、気付くと列車に乗っている。車掌や乗客たちとのやりとり。

### **Tweedledum and Tweedledee**

列車が小川を飛び越し、気付くとアリスは木の下にいる。トゥイードルダムとトゥイードルディーにアリスは出会う。The Walrus and the Carpenterの後、アリスは眠っているハートの王を見る（原作の赤の王は登場せず、ハートの王が同じ役割で出てくる）。どちらの夢かの議論の後、雨が降るかアリスに訊かれてトゥイードルダムとトゥイードルディー傘をさし、傘の下には雨が降らないと言って去って行く（決闘と大鳥のエピソードはない）。

### **White Chess Queen**

二人が去った後、ショールが飛んできて、それを追いかけて白の女王も飛んでくる。アリスと白の女王との会話の後、アリスが白の女王のショールをつけてやり、怪我した指の様子を訊く。白の女王がそれに答えているうちに、だんだん言葉が変になり、白の女王は飛んで行ってしまふ。アリスがそれを追いかけると……

### **Wool and Water**

白の女王は羊に変わっていた。羊からアリスは卵を買う（ボートに乗るエピソードはない）。店は見えなくなり、アリスは卵を探す。

### **Humpty Dumpty**

ハンプティ・ダンプティが現れる。アリスとの対話の後、ハンプティ・ダンプティ

はアリスを追い払うようにして別れる（その後のハンプティ・ダンプティが落ちる話や、白の王やライオンとユニコーンのエピソードはない）。

### **White Knight**

アリスと白の騎士の出会いと対話（赤の騎士と白の騎士の戦いのエピソードはない）。アリスは去って行く白の騎士を見送る。

### **Alice Crowned**

アリスの頭に王冠が下りてくる。

### **Alice with the Two Queens**

気付けば赤と白の女王にアリスは挟まれていて、女王になる試験を受ける。その後、赤の女王の歌う子守歌で、赤と白の女王が眠ってしまう。目の前に門が現れ、押し問答の後でアリスは中に入る。

### **The Banquet**

女王アリスの晩餐。最後に怒ったアリスは赤の女王を捕まえる。

### **Alice at Home Again**

再び最初の室内。アリスは椅子に丸まって、子猫を揺さぶっている。  
(幕)

## **劇音楽**

この舞台の音楽を作曲したのはリチャード・アディンセル (Richard Addinsell; 1904-1977)。

この舞台はミュージカルとして作曲されたが、現在刊行されているピアノ／ヴォーカルスコア<sup>6</sup>を確認すると、以下の曲が作曲されていることが判る（\*は歌の入っている曲、†は、初演時には使用されていないと思われる曲）。楽譜自体は1979年の著作権表示があるが、手書きであり、修正の跡も見られることから、初演あるいは再演時に使用されたものであると考えられる。初演と再演で歌詞が変わっていると考えられる白の騎士の歌 A Sitting-on the Gate の歌詞を確認すると、これが1947年演奏版であることが判明した。

Overture/ Boat Song\*/ Mirror Music/ Jabberwocky\*/ Rabbit Scene/ Crocodile\*†/  
Pool of Tears/ Caucus Race/ Exit of Birds/ Fish and Frog/ Introduction to Duchess  
Scene/ Duchess Lullaby\*/ Cheshire Cat/ Introduction to Mad Tea Party/ In the  
Garden/ Entrance Queen of Hearts/ Grand Procession to Croquet/ Game of  
Croquet/ The Mock Turtle/ Lobster Quadrille\*/ Beautiful Soup\*/ Change to Trial  
Scene/ Trial Entrances/ Finale Act I\*/  
Prelude Act II/ Alice and Red Queen/ Measurements/ Train Scene/ Tweedledum  
and Tweedledee/ The Walrus and the Carpenter\*/ White Queen's Entrance/ Exit  
White Queen/ Exit of Humpty Dumpty and Entrance of White Knight/ White  
Knight's Song\*/ Exite(sic) White Knight/ Red Queen's Lullaby\*/ Finale Act II\*

歌詞の入っている曲は十曲であるが、全篇、音楽に充ちていることが判る。

## 劇の舞台効果

初演時の舞台効果については、必ずしもはっきりしているわけではない。舞台効果について、脚本にほとんど記載がないためだ。これが再演版を元にした脚本の場合だと、大道具を含め、詳細に記載されている。ここでは、脚本や新聞記事等から解る範囲で舞台の特殊効果を見てゆく。

劇の前半、『不思議の国のアリス』では、アリスは大きくなったり小さくなったりする。特殊撮影が可能な映画とは違い、舞台上でアリスの身長を変えることはできない。劇では、いくつかあるアリスの身長変化のうち、原作では第一章から第二章にあたる部分、「Drink me」と書かれた札のついている瓶の中味を飲むと小さくなり、「Eat me」と書かれたケーキを食べると大きくなる。そして、白兔が忘れていった扇子を持つとまた小さくなるという部分を舞台上で再現している。瓶の中味をアリスが飲む。するとアリスのそばにあるテーブルが上へと伸びてゆくのだ。その間に、アリスが抜けようとしていたドアも、アリスの通り抜けられるサイズに入れ替わる。ケーキを食べて大きくなる時は、この逆が行われる<sup>7</sup>。バレエが好きな人は『くるみ割り人形』の舞台を思い出していただければ良い。第一幕、夜中に目が覚めたクララが人形の大きさにまで小さくなる。それを視覚で表すため、舞台ではクリスマスツリーがどんどん伸びてゆき、最後には大木のようになる。そうすることで相対的に人物が小さくなったことを見せているのだが、ガリエンヌの舞台では、それをアリスが小さくなったときと大きくなったときという風に、身長の変化を双方向で見せている。

加えて、冒頭の大きなアリスと、涙の池以降の、小さくなったアリスを表すため、もう一つの効果をガリエンヌは取り入れている。

プログラムや劇場パンフレットを見ると、白兔だけ、( ) 付きで二人以上が配役されている<sup>89</sup>。これは 1947 の再演時でも同じである。しかし、1982 年、三度目の上演の際に、パンフレットの配役の記載に変更があった。登場順で記載されている配役欄、白兔は **Small White Rabbit** という役名と配役がアリスの次に記載され、その後、青虫の前に **White Rabbit** の役名と配役が記載される。つまり、冒頭の、身長の変化の起きる前と、「Eat me」のケーキを食べて巨大化した後のアリスが会う白兔は、身体の小さな俳優が演じているのだ。そして、再び小さくなって以降、身長が固定されてからは、大きな白兔の俳優に交代する。それにより、アリスの身長の変化を相対的に見せている。

公爵夫人の赤ん坊が子豚になる場面では、本物の豚（フィービーと名付けられていた）が使われている<sup>10</sup>。

トゥイードルダムとトゥイードルディーが歌う **The Walrus and the Carpenter** では、セイウチ、大工、牡蠣を人形で動かしている。セイウチと大工はそれぞれ 7 フィート以上の大きさ、一方、牡蠣のパペットは 1 フットの大きさ<sup>11</sup>。そうすることによって、

両者の大きさの違いが際立つ。

白の女王の登場場面がやはり特殊効果が使われている。劇では、白の女王はワイヤーによる宙乗りで現れる。原作では飛んでしまったショールを追いかけて白の女王が猛スピードで走って来るのだが、その速さを、空を飛ぶことで表しているわけだ。演じるのは座長であるガリエンヌ<sup>12</sup>。もともとガリエンヌは宙乗りのできる女優であった。この一座で *Peter Pan* を上演した時、ガリエンヌが主役を勤め、その際、観客席の頭上を宙乗りで飛んでいる<sup>13</sup>。白の女王の登場するこの場面ではその後、再び飛んだショールを、白の女王が飛んで捕まえるという場面があり、白の女王が羊になるくだりも、劇では白の女王が飛び去り、それを追いかけたアリスが羊に変身した白の女王を見つけるといって表現されている。まさに白の女王の場面はガリエンヌによる宙乗りで成り立っているのだ。おそらく劇自体の呼び物として、この場面は企画されたのであろう。白の女王は、宙乗りを含めてガリエンヌの持ち役となり、その後の様々なメディアによる再演でこの役は、一つを除いてすべてガリエンヌによって演じられている。

女王アリスの戴冠場面では、冠が上から下りてきて、アリスの頭へと載る。原作では最後の川を飛び越した時点でアリスの頭に載っていたのだが、劇では川を飛ぶ場面がない代わりに、目の前でアリスが「戴冠」する<sup>14</sup>。

そして、劇全体における効果（特殊効果という言い方は妥当ではないが）として特筆すべきは、舞台の背景や大道具をすべて可動式にしたことだろう。アリスがずっと舞台にいて、その後ろでどンドンと場面が変わる、「居所変わり」による場面転換だ<sup>15</sup>。これによりスピーディーな場面転換を可能にしている。

## 劇の特徴と影響

ガリエンヌとフリーバスの筆になるこの劇であるが、作者達はこの劇を単に子供向けとは考えていなかった。

Our production then will not be *primarily* for children; we will not play down to them any more than Carroll wrote down to them and Tenniel drew down to them. The "pretty-pretty," the "cute" and the "saccharine" will be as drastically eliminated on the stage as in the book.<sup>16</sup>

*New York Times* のインタビューに対しても、ガリエンヌはこう答えている。

.... "First, it will not be a play for children only, as other adaptations have been. The story as Carroll wrote it is enjoyed as much, if not more, by adults than it is by children, and that's what we mean the play to be<sup>17</sup>."

上記の姿勢から来るものであるが、大きな特徴として、劇中の科白が原則として原

作『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』から採られているという点がある。この点についてガリエンヌはこう書いている。

In arranging the acting version Florida Friebus and I have used *only* Carroll's dialogue. We have tried to bring in all famous and best loved scenes, merely rearranging them to form a whole in accordance with the demands of stage presentation.<sup>18</sup>

これは一見すると当たり前のように見えるが、後続の多くの映画やドラマでは、原作にない科白や歌が平気で挿入され、原作の科白を押しよける結果となっているものが多い。本来、キャロルの描く世界を活かすために行われた科白の採用が、逆にこの劇の、他に見られぬ特徴となっているのは皮肉な話だ（もっとも、作中の設定の細かな変更や、初演後の改訂により、必ずしもキャロルの科白そのままではない部分もあるので「原則」とした）。

同じく原作重視の姿勢から、この劇では登場人物の扮装を、テニエルの挿絵に忠実にした。ただ、これは我々が想像する、例えば映画『ドリームチャイルド』のマペットのような忠実さではない。白黒のテニエルの版画をそのまま立体化したような忠実さであった。そして、その中でアリスのみ、自然な色の衣装を着ている。

.... He has caught to perfection the mixture of fun, irony, sense and nonsense that radiates from Carroll's book. Therefore in the production all form and line follow faithfully his masterly and famous drawings.

The colors in the dream-surroundings are strictly limited to those used in cards and chess games: Red, Black, White, Yellow and Green. The only realistic coloring in the production will be in Alice herself and in her room before her adventures start and after they end.<sup>19</sup>

これを映画で撮影したとすれば、おそらくは不気味な光景となるだろう。事実、この劇の衣装を、いくつかの部分で大きな変更はあるものの相当程度に再現したと思われる、1983年のテレビ・ムービー<sup>20</sup>では、登場人物達が不気味な印象を醸し出している。おそらく、こういう設定が可能だったのは、クローズアップのない、舞台演劇であったからであろう。

そして、キャストについてもこの劇では特徴がある。ハートの女王、公爵夫人、料理人を男性が演じているのだ。これは、再演に際しても踏襲され、これらの役が女優になっているのは、ガリエンヌが演出と出演から外れた、1983年のテレビ・ムービー版だけである。このことについてガリエンヌはこう語る。

The idea of using men in the parts of the Queen of Hearts and the Duchess, as



well as her famous pepper-loving cook, is intended to enhance further the grotesque quality so definitely indicated in the writing and in the Tenniel illustrations.<sup>21</sup>

以降の映画やドラマでは、例えばジョナサン・ミラー監督 *Alice in Wonderland*(1966) やウィリアム・スターリング監督『不思議の国のアリス』(1972) で公爵夫人を男性が演じたことがあるが、ここまで徹底して三人とも男性という例はない。

しかし、この劇の最も大きな特徴は、『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』の二つの話を一つの話にまとめたことであろう。『アリス』の劇としては、すでにキャロルの生前、キャロル本人の意向の入った劇として 1886 年に初演されたオペレッタ『不思議の国のアリス』がある。サヴィル・クラークの筆になるこの劇では、ガリエンヌ同様、第一幕が「不思議の国」、第二幕が「鏡の国」であるが、この幕の間に全く関連がない。一幕の冒頭、アリスが木の根元で眠っている。そして白兎が現れ「不思議の国」の冒険が始まるのだが、最後の裁判では、アリスが無罪の判決を言い渡し、ハートの女王も押し切られてジャックは無罪、ハッピーエンドで終わる。そして第二幕では、前の幕のことは、まったくなかったかのように「鏡の国」へ行く。そして第二幕の最後で、目覚めたアリスは第一幕冒頭の木の根元に戻る。第一幕、第二幕と、一連の夢であったということは大きな枠組みとして設定されているが、第一幕の幕切れと第二幕の間では、全く別の話のようになっている。

もともと別個の物語である以上、それは仕方のないことではあるのだが、一つの劇の中で両方の物語を上演し、なおかつ一つの物語であるような統一感を持たせるには、二つの物語をつなぐ工夫が必要になる。ガリエンヌの劇では、それを

- 1) 最初にアリスに鏡を通り抜けさせることにより、「不思議の国」も鏡の世界の中の国という形にした。それによって「不思議の国」「鏡の国」の世界が地続きになった。
- 2) 裁判から逃げ出し、道に迷ったアリスが赤の女王に出会うという形で、「不思議の国」から「鏡の国」へと、ドラマの筋が続くようにした。これで一幕と二幕に筋の上で連続性が生まれた。
- 3) 原作では眠っている赤の王が登場する場面を、赤の王からハートの王にすることで、第二幕と第一幕に関連性を持たせた。
- 4) 原作のハッタとヘアを省略、白の王とアリス、ヘアの「Nobody」をめぐる議論をハートの王、アリス、三月兎の議論へと変更した。これにより「不思議の国」「鏡の国」の間で重複しているキャラクターを整理し、同一人物なのか別人なのかはつきりしないそれぞれのキャラクターで観客が混乱することを避けた。

ただ、これらの手法のうち、1 と 4 は必ずしもガリエンヌの独創というわけではない。アリス・ガーステンバーグ (Alice Erya Gerstenberg; 1885-1972) の戯曲 *Alice in*

*Wonderland* (1915。邦題『鏡の国のアリス』) も、やはりアリスが鏡を抜けた世界で「不思議の国」と「鏡の国」の登場人物たちと出会う。しかしガーステンバーグの場合、鏡の向こうの世界は原作の「不思議の国」と「鏡の国」がない交ぜになっていて、ガリエンヌのように、二つのストーリーを一つにするための手法として鏡を抜ける設定を採ったのではない。これは、一にガリエンヌのオリジナルな発想といえよう。

ヘアと三月兎を同じキャラクターに設定して、白の王ではなくハートの王とアリス、それに三月兎の間で「Nobody」を巡る議論をさせるのも、ガーステンバーグに先例がある。ヘアと三月兎を同じキャラクターとするのは、それ以前、サヴィル・クラークがすでに行っている。ここでは（なぜか）赤の王と三月兎、アリスでの会話になっているが。第一幕と第二幕とはいえ、同じ劇で「気違いお茶会」と「ライオンとユニコーン」を扱う必要のあったクラークも、二つの物語をない交ぜにしているガーステンバーグも、三月兎の処理は、やはり観客の混乱を避けるために必要であった。

また、2にしても、ガーステンバーグに発想の元があると言えるかもしれない。ガーステンバーグの劇では、クロッカーのゲームの中にチェシャ猫が現れ、騒ぎになった後、ハートの女王がアリスの首を斬れと言ひ、その場にいた面々は、自分たちからアリスに女王の目が向かったことに安心して、同じように「首を斬れ」と言う。そしてアリスは逃げ出し、次の幕へつながる。ただ、ガーステンバーグの場合、次の幕でアリスが会うのは青虫。そしてアリスは劇の最後で裁判に出ることになり、ハートの女王の言葉に対し、今度は「You're nothing but a pack of cards!」と言うことになる。二つの物語を、時間軸も含めてない交ぜにしたガーステンバーグの場合、ハートの女王の前から逃げ出すというは、原作にない上に、単に舞台転換の都合上のなくもがなの工夫を超えるものではないが、ガリエンヌの場合、これにより、二つの物語を結びつけることを可能にしている。

ガーステンバーグの戯曲は、ガリエンヌ版が出るまでは『アリス』の戯曲の代表作の位置にあった<sup>22</sup>。ガリエンヌはガーステンバーグの戯曲を知った上で、それを洗練させた形で自分の戯曲に取り入れたとあって良からう。

そしてもう一点、ガリエンヌの劇の特徴といえるのが、裁判の場面で法廷にいる全員に、アリスに向かって「首を斬れ」と言わせていることだろう。原作ではこの言葉を言うのはハートの女王のみである。しかしガリエンヌの劇では、原作のハートの女王対アリスの構図が不思議の国の住民対アリスとなる。これは、その後アリスが逃げ出すという必要からではあると思われるが、後の多くの映画に出てくる、法廷の全員から「首を斬れ」と言われるアリスという場面は、実にこの劇を嚆矢とする。

## 初演とその評判

*Alice in Wonderland* は 1932 年 12 月 12 日に初演された。主役のアリスを演じたのは先述のジョセフィン・ハッチンソン<sup>iii</sup>。上演当時、既に 29 歳であった。なぜ、この

---

<sup>iii</sup> ジョセフィン・ハッチンソンは巡業の終わった 1934 年、ハリウッド映画『春の夜明け』(*Happiness Ahead*) に主演する。現在もアメリカ版 DVD で鑑賞可能 (All Regions)。彼女

年齢の女優がアリスを演じたか、1947年の再演時、主演女優を選ぶに当たってガリエンヌが考えていたことが参考になるだろう。

Many pretty little girls, some crowned with Hollywood laurels, had been suggested for the part, but Alice is not a "pretty little girl." Apart from the desirability of suggesting Tenniel's drawings, Alice's whole personality, as indicated in her lines and actions, is solemn, intensely proper, at times verging on the priggish. Alice is a character part, not a child ingenue.<sup>23</sup>

*New York Times*の記事から、この劇の評判を見てみよう。公開以前から *New York Times* では *Alice in Wonderland* を含むこのシーズンの彼女の劇団の上演作について記事にしていた<sup>24</sup>が、初日には、前日のドレス・リハーサルの劇評が掲載されている<sup>25</sup>。子供が気に入るだけでなく、大人も郷愁に誘われ、この劇を気に入るだろうと評され、末尾には

.... If the Oxford don had not grown tired of "Alice in Wonderland" long before he died, he would have enjoyed this guileless stage transcription.<sup>26</sup>

と、好意的な評だ。

最終的にこの劇は1933年5月6日まで上演された<sup>27</sup>。当初、Civic Repertory Theatreで上演されていたが、1933年1月30日からより大きなNew Amsterdam Theatreに移っている<sup>28</sup>。その後、1933年10月から翌年春にかけて巡業が行われた。

劇が好評であったことの例証として、*New York Times* は、コロンビアがこの劇の映画化に向けて、5月でブロードウェイとの契約が終了となるガリエンヌと話し合いに入っているとの記事を掲載している<sup>29</sup>。これは噂話などではなく、事実であったが、後述する事情により映画化の話は立ち消えになっている。

## パラマウント映画『不思議の国のアリス』

ガリエンヌの一座が巡業を行っている間、パラマウントは映画『不思議の国のアリス』(*Alice in Wonderland*)の製作を進め、1933年12月に公開する。この映画は、ガリエンヌの劇の脚本を下敷きにしたと考えられる。もちろん、映画のクレジットを見る限り、そういう記載はない。あくまで脚本は、原作を下敷きにしてジョーゼフ・L・マンキーウィッツが書いたとなっている。しかし、ガリエンヌの劇の影響については当時から言われていたことで、ガリエンヌの劇が公開されていた時期にニューヨークに在住、帰国後、映画の日本公開時に字幕を訳した清水俊二もこう述べている。

---

は1959年、ヒッチコックの『北北西に進路を取れ』(*North by Northwest*)にもタウンゼンド夫人役で出演している。この映画の主演はケーリー・グラント。1932年ブロードウェイのアリスと1933年パラマウント映画の海亀フーが同じ画面で共演している。

……ギャリアンヌと、門下のフロリダ・フリーバスとが苦力して脚色したものであるが、映畫に脚色したジョセフマンキウキツとウキリアムキャメロン・メンジスも芝居の脚色を踏襲してゐる。

(中略)

映畫の脚色は、前述の通り、芝居の脇本を殆どそのまま書き直してゐる。<sup>30</sup>

では、本当にこの映画がガリエンヌの劇を下敷きにしたのであろうか？ 映画の設定を見てみよう。

時期は冬、アリスと家庭教師の会話のシーンで始まり、アリスが部屋にあるチェスの駒や、水槽の中の海亀、窓の外で雪の中を走っている白兎を見たりしている。そのうち眠り込んだアリスを見て家庭教師が部屋を出て行く。そのドアの音で目を覚ましたアリスが鏡の向こうに興味を持ち、暖炉の上へ上って鏡の中へ入り込み……、と『鏡の国』の設定で話が始まる。その後、家の外へ出たところ、慌てふためいている白兎を見て、追いかけて兎穴へ飛び込む、というところから『不思議の国』のストーリーとなる。海亀フーとの話の後、アリスはグリフォンに連れられて走るが、いつの間にかグリフォンは赤の女王に変身していて、そこから『鏡の国』のストーリーとなる。女王アリスのパーティーの最後、アリスは赤の女王に首を絞められる。目覚めたアリスの上にはダイナが乗っていた。

劇では『不思議の国』『鏡の国』の二つの話を一つの話に統合するために「鏡を抜けたアリス」という枠を大きく設定して、鏡の国の中で、最初に白兎を追いかけて『不思議の国のアリス』のドラマへ移行するように作られている。映画でも話全体が「鏡を抜けた世界」の出来事となっている。劇では舞台という制約上、すぐに白兎が現れる。一方、映画では『鏡の国のアリス』の原作通りに外へ出て、そこで白兎を追いかけて、『不思議の国のアリス』の原作通り兎穴に落ちるという展開となるが、物語を統合するための世界の大枠の設定は、劇と映画で全く同じといふことができる。

次に、原作のエピソードの取捨選択について見てみると、映画は劇で取り上げられた場面を削る形で作られている。映画にあって劇にない場は、アリスと白の王が会う場面だけだ（ただし、映画で白の女王のやり取りとして使われた「無人が見える」というくだりは、劇では裁判の場面でアリスとハートの王の会話として再現されている）。もちろん、各場面で原作の脚色に違いはある。例えば映画では、青虫に教わってアリスが茸で身体の大きさを調整するエピソードやトゥイードルダムとトゥイードルディーの決闘のエピソードなどが原作から採られている。そして、これらは劇には見られない。また、映画はミュージカルではないことから、歌の要素はほとんどない。しかし、映画の場面が、劇で採用されている場にほとんどすっぽり収まってしまふという点は、偶然とは思えない。特に映像として描けば面白そうな、白兎の家の場面や羊と

アリスがボートに乗る幻想的な場면을映画では欠いているのは、原作を直接脚色して映画にしたと考えるなら、不思議に思える部分だろう。

そして演出上、映画が明らかに劇を踏襲している部分がある。白の女王の登場場面だ。劇ではアリスがトゥイドルダムとトゥイドルディーと別れると、次の場面でショールが飛んできて、それを捕まえたアリスの前に白の女王が空を飛んでやって来る。原作では猛スピードで走って来るのだが、その速さを、空を飛ぶことで表しているわけだ。舞台では、白の女王がワイヤーで吊られて宙乗りで登場する。映画では、鳥が風と共に現れた後、飛んで来たショールが巻き付いたアリスのところへ、白の女王が同じくワイヤーで吊られて、飛びながら現れる。原作の描写を読むと、ここでわざわざ白の女王を飛ばせる必要はない。

そう、パラマウントはクレジットにこそ書いていないが、明らかにこの劇を下敷きにしているのだ。

しかし、映画は映画として、舞台とは違っている部分もある。以下、それを見てみよう。

ストーリー上の大きな違いとしては、『不思議の国』終わりと『鏡の国』の始まりをどう繋いでいるかという点がある。ミュージカルでは、裁判からアリスが逃げ出し、次の幕で赤の女王と出会うという形をとっている。第一幕と第二幕を分けて、なおかつその間に幕間の時間をとれる舞台ならではの解決だ。映画では、この部分を休憩なしで続ける必要があることから、先述のように裁判の場面をなくし、グリフォンがアリスを連れて走ると、そのまま赤の女王に変わることで『鏡の国』への導入とした。

また、劇では公爵夫人、料理人、ハートの女王を男性が演じているが、映画では女優が演じている。

一番大きな違いは、映画ではミュージカルの要素が全くないということだろう。筋らしい筋のない『アリス』を映像化する際、その弱点をカバーするためにミュージカル化するというのが、数ある『アリス』映画の代表的手段である。そして、その元祖ともいえるのが、1886年に上演された初の舞台劇『不思議の国のアリス』であった。そして1932年の劇もミュージカルとして上演されている。一方、そのミュージカルを下敷きにしつつも、1933年に公開された本作は、ミュージカルの要素をすべて省いている。歌があるのは、あくまで原作で歌のある場面に限られる。

ミュージカルの要素を省いた理由は不明だ。しかしいくつか想像はできる。一つはスキャンダルを避けるため。上映当時、すでに指摘があったくらいに、映画は劇と似通っている。これでミュージカル映画にしていたらどうであろうか。スキャンダルになっていた可能性は十分に考えられる。そもそもコロンビアでガリエンヌたちの一座で映画化される話が進んでいて、調印直前まで行っていたところ、パラマウントが映画製作の名乗りを上げたので、コロンビアが映画化を取り止めたのだった<sup>31</sup>。そして、その後パラマウントのスタッフがガリエンヌ一座の劇を観に来ていたし、ガリエンヌにパラマウントのスタッフがテニエルの電話番号を問い合わせたともいう<sup>32</sup>。また、ガリエンヌ自身、この映画を観ている<sup>33</sup>。ガリエンヌ自身の記憶違いと思われる記述も

あるにはある<sup>iv</sup>が、パラマウント映画に対しては、筆致は辛辣である。

もう一つは実際的な問題として、歌って踊れる俳優を集めた上で、専用の楽曲や振付を用意して撮影する手間と時間を考えるなら、ミュージカルの要素のない映画として作った方が楽だということもあるかと思われる。W.C.フィールズ（ハンプティ・ダンプティ）やベビー・ルロイ、ゲイリー・クーパー（白の騎士）といった、当時のオールスターキャストで撮影されているが、作品の性質上、アリス以外はすべての期間にわたって拘束される必要はない。役柄によっては、科白のアフレコ時にいるだけで問題ない俳優もいる（ケイリー・グラントがこの例。彼は海亀フーを演じているが、被り物のため、顔が一切出ない。仮にスタンドインが演じて声だけ当てたととしても、誰かが気づくとは考えにくい）。また、この映画にはエキストラは全くと言って良いほど出ない。わずかにクロッカーの場と女王アリスのパーティーの場くらいが、エキストラの出番といえる。配役のために一見豪華に思えるが、実際の撮影は小規模で済んでいる（場面のほぼすべてをスタジオで撮影しているのも、大掛かりなロケを要さずに済むことに貢献している）。ミュージカルに出演できる技術を持った俳優は限られる。後述するが、ガリエンヌもそれを後に身をもって知ることになる。

映画が封切られたのは1933年の12月。ガリエンヌ一座の巡業中であったが、このタイミングはさすがに偶然だと思われる。「評判の舞台を映画で見られる」ことがセールスポイントになるという意識が制作者側になかったとは言えないだろうが、ガリエンヌとフリーバスの名前をクレジットしてない点を考えるなら、積極的に「評判の舞台が見られなかった人のために、映画で配給する」ということまでは考えていなかっただろう。

なお、この映画の封切り時、*New York Times*の映画評ではガリエンヌの劇との比較がされている。

.... The film is quite satisfactory, but it does lack the smoothness and high quality of the Eva Le Gallienne stage production. The scenes seldom give the pleasant mind's eye picture inspired by reading Alice's adventures and glancing at the Tnniel drawings.

As has already been widely heralded, Charlotte Henry, a 17-year-old girl from New York, fill the part of Alice. It is her idea of Alice and as such is an acceptable portrayal without creating any deep impression, such as Josephine Hutchinson did in the role on the stage. Little Miss Henry is attractive, but her histrionic ability is apparently limited to a juvenile conception of moods. She speaks distinctly but her enunciation lacks the all-necessary shading.<sup>34</sup>

---

<sup>iv</sup> 自伝では *The Walrus and the Carpenter* の場面で、パラマウント映画はガリエンヌの劇と同じくパペットで牡蠣を表現していたとあるが、実際の映画ではこの詩はアニメーションで表現されている。

ただ、この映画評では上記に挙げた、映画が劇を下敷きにしたかどうかという点には触れられていない。

## 1947年の再演

1947年、この劇が再演される。初演時はガリエヌの一座の作品として作られたが、今回はリタ・ハッサン (Rita Hassan; ca.1905-1973) が再演の企画をガリエヌに持ち込み、その熱心さに折れた形で彼女が、自身の主催する American Repertory Theatre にハッサンを招聘、再演という形になった<sup>35</sup>。ハッサンが再演を計画していることは、前年末に報道されている<sup>36</sup>。この時にはハッサンは、MGMの支配人ルイス・G・メイヤーに、アリス役としてマーガレット・オブライエン<sup>v</sup>を起用することで交渉している。そして、ハッサンの企画をガリエヌが了承し、American Repertory Theatre で公演することが報じられたのが1947年1月<sup>37</sup>のことだ。最終的に再演の主役に選ばれたのはバンビ・リン (Bambi Linn; 1926-<sup>vi</sup>)。

1947年4月5日の初日は大成功であった<sup>38</sup>。ブロードウェイの演劇とはいえ、この段階では地方巡業など行われていないのに、アリスとハンプティ・ダンプティの写真が *LIFE* 1947年4月28日号の表紙を飾り、劇の各場面が舞台写真と共に紹介されている<sup>39</sup>。この公演は5月まで International Theatre で演じられ、その後 Majestic Theatre へ移転<sup>40</sup>、6月28日まで行われている<sup>41</sup>。

再演に当たってガリエヌは脚本を改訂している。ガリエヌはこれ以降も脚本を改訂し、1977年の改訂版までが出版されている。その間の1948年、1949年、1960年、1976年、1977年に、"Revised and Rewritten"と称し、著作権更新のための見直しを行っている。この見直しは、必ずしも改訂に結びついている訳ではなく、全く本文を変更しない場合もあった。筆者の手許には1960年版と1977年版があるが、その二つの間では目立った変更はない。残念ながら1947年の再演時の脚本が入手できていないため、1947年時点で初演からどの程度の変更があったかははっきりしない。ただ、1960年版にも1977年版にも扉に "As presented by Rita Hassan and the American Repertory Theatre, April, 1947" とあり、1960年版の出版歴には "REVISED AND REWRITTEN 1948 BY EVA LE GALLIENNE AND FLORIDA FRIEBUS" とあることから、原則として再演時の脚本に従いながらも、改訂している部分が存在する可能性がある。詳細は不明であるが、配役一覧に列車乗客の馬がないことから、最低限、以下の変更はあったと思われる。

1932年版脚本<sup>42</sup>の p.83-84、「しゃがれ声 (Hoarse voice)」の科白の後、アリスと蚊のやりとりの部分が1960年版の脚本ではカットされており、馬が話していた「It's only a brook we have to jump over」の科白が1960年版では白い服を着た紳士の科白にな

---

v マーガレット・オブライエンはその後、ウォルト・ディズニーからもアリス役のオファーを受けている。

vi バンビ・リンはいくつかの映画にダンサーとして出演している。この劇に近い時期のものでは、1955年『オクラホマ!』 (*Oklahoma!*) のヒロイン、ローリーの夢の場で、夢の中のローリーとしてダンスを披露している。

っている<sup>43</sup>。それによって、馬が話に出ないことになるのだが、1947年の時点で、この部分はすでに改稿されていたと考えて良い。

アリスと青虫のやりとりの後、脚本では1932年版も1960年版も青虫が舞台を去るとト書きにある。しかし、*LIFE*に掲載された舞台写真では、やりとりの後、アリスが茸の陰に隠れて、公爵夫人の家の前の魚と蛙の伝令を見ている場面でも、青虫はまだ茸の上にいる<sup>44</sup>。

一方、舞台写真から、*The Walrus and the Carpenter* では、牡蠣だけではなくセイウチと大工も初演時同様にマリオネットであることが判る<sup>45</sup>。

しかし、この公演については、興行的には失敗だったようだ。*New York Times* では1947年の演劇の総括で、演劇ベスト10に入れながらも(a failure)と記載している<sup>46</sup>。場面転換が多く、特殊効果を使用するこの劇は、どうしてもコスト高になってしまうのだ<sup>47</sup>。公演終了を報じた*New York Times* では、同年8月より巡業が行われるとしている<sup>48</sup>が、費用の問題から、巡業は断念された<sup>49</sup>。

しかし、この公演は一つの副産物を生んだ。公演中、出演者を起用して録音された、劇のレコードである。

### レコード *Alice in Wonderland*<sup>vii</sup>

劇場を Majestic Theatre に移し、公演を行っている間、ガリエンヌの一座は RCA Victor にてこの劇の録音を行っている<sup>50</sup>。劇そのものの録音ではなく、全体を大幅に短縮し、1時間弱にしたものだ。レコードは翌1948年、12インチレコード(SP盤)6枚組で発売された<sup>51</sup>。*New York Times* のレコード評では、

Speaking of things delightful, one of the most charming albums for the younger set — or the older, for that matter — to come along in many months is the recording of **Alice in Wonderland** (Victor. six twelve-inch disks)....

(中略)

.... It is a pleasure to hear lines read with style. It is doubly a pleasure to hear a children's story told with relish and without a trace of condescension.<sup>52</sup>

と、好評であった。この録音は、現在CD化されていて、聴くことが可能である<sup>53</sup>。以下、CDに記されたトラックを見てみよう。

1. Opening: 'A boat beneath a sunny sky' Into Looking-Glass World/ 'Jabberwocky'
2. The White Rabbit/ The Pool of Tears/ The Caucus Race
3. The Caterpillar/ 'You are old, Father William'

---

vii レコードのタイトルは *Alice in Wonderland* であるが、録音冒頭のガリエンヌによるナレーションでは *Alice's Adventures in Wonderland* と呼ばれている。



4. The Footmen/ *'Speak roughly to your little boy!'* The Cheshire Cat
5. The Mad Hatter's Tea Party
6. The Gryphon and the Mock Turtle/ *'Will you walk a little faster?!'* *'Turtle Soup'*
7. The Trial/ *'They told me you had been to her!'* The Collapse of the Pack of Cards
8. The Red Queen / Running with the Red Queen
9. The White Queen
10. Humpty Dumpty
11. The White Knight/ *'A sitting on a gate'*
12. The Red Queen and the White Queen/ Lullaby
13. Queen Alice/ *'To the looking-glass world'*
14. The End of Looking-Glass World / Reprise: *'A boat beneath a sunny sky'*

舞台からいくつかの場면을削除していることが解る。もちろん、それだけでは 1 時間足らずの録音に収められる筈もなく、各場面でも削除／改変がある。そして、音だけで筋を理解させるために、ドラマの進行はナレーションで語られる。ナレーターはガリエヌ自身。劇では目に見えるものの、科白だけでは判らないような場面の説明にナレーションは必須である。

上記トラックにより、場面の削除は概ね判ると思われるが、削除に伴うストーリーの変更箇所を以下に記す。

- ・ レコードでは、アリスは「Drink me」の札のついた瓶の中味を飲んで小さくなり、その大きさのまま泣き、その涙の池に落ちる。
- ・ ダイナの話をしたために動物たちが逃げた後、アリスはすぐに青虫に会う。ここで兎に会わない。
- ・ 女王のクロケータ場の場面がカットされたため、アリスはグリフォンに出会い、グリフォンから「海亀フーに会ったことがあるか」と尋ねられる。
- ・ 白の女王が飛び去った後、アリスが羊に会う場面はなく、そのままハンプティ・ダンプティに出会う。
- ・ アリスの戴冠は、1932 年版では上記アリスの科白の後、アリスの頭に王冠が下りてくる演出だが、レコードでは、左右に女王がいるのに気づき、その後、頭に王冠が載っているのに気付いている。
- ・ 目覚めたアリスは「Why, what a curious dream!」という、1932 年版にも 1960 年版にもない科白を言う。おそらくはレコードということで、説明のためにつけたと思われるが、1947 年の再演の時に、この科白をアリスが言っていた可能性もゼロではない。

また、レコードでは 1932 年版の科白をカットするのではなく、1960 年版の科白と同じ形に変更されているものがある。また、ナレーションから、1932 年版よりは 1960 年版に近い場面が語られている部分もある。これらも、おそらくは 1947 年の再演時に

変更されたものがレコードに録音されたと考えて良い。以下、1932年版脚本<sup>54</sup>のページと共に記す。

- ・ p.59: 1932年版では Beautiful soup の歌が一番だけなのに対し、レコードでは2番も歌われる。但し、1番と2番の間に1960年版でリフレインされている「Soup in the evening, beautiful soup!」に始まる6行の歌詞はなく、これらは2番の後ろでのみ歌われている。そして、グリフォンの「Chorus again!」の科白と、海亀フーの歌い出しの部分がカット。
- ・ p.74: 1932年版ではアリスが「Who cares for you! You're nothing but a pack of cards!」というハートの女王が「Off with her head! Off with her head!」と言い、アリスはその場から逃げる。レコードでは原作通りトランプが飛びかかって来たとなレーションで説明があり、それからアリスは逃げることになる。これは1960年版脚本でアリスの科白の後、暗転。幻灯によってトランプがアリスへ飛びかかるのを映写、アリスは祓い落とそうとするが、逃げるというのと同じ。
- ・ p.81: 赤の女王とアリスが別れる際、1932年版では赤の女王が「Good-bye」と言って去り、アリスは「She can run very fast」と驚くが、1960年版では両者の科白の順序が入れ替わっている。
- ・ p.120: 白の騎士の、詩の名前に関する議論がレコードでは1960年版同様に全部カット。上演とは関係なく、録音時間の関連とも考えられるが、白の騎士の詩の歌詞変更を考えた場合、1947年上演時に、ここではカットがあったと考えて良い。
- ・ pp.121-122: 白の騎士の詩は1932年版、1960年版どちらも原作の詩を抜粋しているが、前半部分では1932年版と1960年版で抜粋する箇所が変わっている。レコードでは1960年版の歌詞を更に抜粋した形で歌われており、1947年版の時点で、すでに歌詞に変更があったと考えられる。
- ・ p.129: 1932年版では白の女王の「a set of Thursdays, you know.」との言葉に対し、アリスは「In our country there's only one day at a time」と答え、それに対して赤の女王が「That's a poor thin way of doing things....」と答えるが、レコードでは1960年版同様、赤の女王の科白の前に、二人の女王の「Poo!」という科白が入る。
- ・ p.132: 二人の女王が眠ってしまった後、アリスは「What am I to do?」といい、1932年版では女王が消えるまで科白がないが、レコードでは1960年版にある「Do wake up, you heavy things!」の科白がある。

当時において、個人が自宅で何度も舞台を楽しむことのできるメディアは、レコードしかなかった。この録音で、*Alice in Wonderland*は、新たなメディアに進出したといえよう。

## 1955年のテレビ・ムービー *Alice in Wonderland*

ガリエンヌの脚本は、1955年にテレビ番組 *Hallmark Hall of Fame* の中の一話として取り上げられた。この番組は、グリーティング・カード販売の Hallmark 社（現在、

日本法人も存在する)の一家提供で名作劇をテレビ化して放映するというものである。Hallmark社は、後にニック・ウィリング監督の『不思議の国のアリス』(1999)の配給を行っている。

番組の放映は10月23日午後4時~5時30分<sup>55</sup>。制作はモーリス・エヴァンズ(Maurice Evans; 1901-1989)、監督はジョージ・シェーファー(George Schaefer; 1920-1997)<sup>56</sup>。演じるのはジリアン・バーバー(Gillian Barber; 1940-)。イギリスの子役女優で、当時14歳であった。上記体制である以上、キャスティングについてガリエンヌが関与したとは考えにくい。もともとガリエンヌはアリスの話す言葉としてイギリス発音であることにこだわっていた<sup>57</sup>。そういう意味ではイギリス人女優は歓迎すべきことであるが、同時に、アリスを子役が演じることについては否定的であった<sup>58</sup>。一方、公爵夫人、料理人、ハートの女王については初演以降のガリエンヌの方針通り、男性が演じている。ここのみガリエンヌが強く主張したのか、モーリス・エヴァンズも男性が演じる効果を認めていたのか。この点については不明である。

このドラマが、全国で放映されるテレビ放映という媒体であることからか、*LIFE*がこのドラマについて取り上げている。ドラマの紹介というよりは、その前宣伝に近く、ジリアン・バーバーの紹介になっている。大人の女優が演じることの多いアリスを子役が演じること、そして、アリスを演じるためにイギリスから来たということを出題にしているのだ。メインの記事ともいえる写真は、アリスの扮装をしたジリアン・バーバーがピカデリー・サーカスにいる写真、タワー・ブリッジを背景にロンドン塔のビーファイターと話している写真、ロンドン塔の中で騎士の甲冑に囲まれている写真、リッチモンド・パーク動物園でペンギンと一緒に写っている写真の4枚である<sup>59</sup>。

テレビ化に当たり、脚本の共著者であるフロリダ・フリーバスが脚色している。映像は残念ながらソフト化されておらず、元の脚本からの具体的な変更点は判らない。しかし、キャスト一覧を見ることで、変更点が判る部分もある。

- ・ おそらく放映時間の関係で、ナレーションで説明する必要のある部分があったのであろう。モーリス・エヴァンズがナレーターを務めている。
- ・ 白兎の配役は一人だけである。この番組でもアリスの身体の高さが変化するの、当時の新聞記事で確認できる<sup>60</sup>のだが、後述する理由により、配役を二人使ってアリスの身長の変化を表す必要がなかったためであろう。
- ・ 鼠やドードーをはじめ、涙の池から上陸した面々がクレジットにない。Caucus Raceと鼠の「尾話」はカットされていた可能性が高い。
- ・ 放映時間というより予算の都合であろうが、バラを赤く塗る園丁は一人だけである。
- ・ 列車の場面の登場人物がクレジットにないので、この場面も削除されたと考えられる。
- ・ セイウチと大工が配役にクレジットされている。そこからThe Walrus and the Carpenterは、セイウチと大工については人間の俳優が演じたと考えられる。
- ・ 赤の王がクレジットされている。後述するように劇で「ハートの王の夢」に変更された「赤の王の夢」を、原作通りに戻した結果である。ただ、1960年版の脚本で

は「ハート／赤の王の夢」という部分自体がカットされている。1947年版でハートの王の夢があり、それがこのドラマで赤の王に変更され、1960年版でこの部分をカットしたのか、1947年上演でカットしたハートの王の夢をこのドラマで原作通りに赤の王として復活し、出版された脚本そのものは変更しなかったのか、現時点では不明である。

- ・ 羊がクレジットされていないことから、白の女王の場からすぐハンプティ・ダンプティの場に移ったと考えられる。

メイクについては、当時のメイクアップ担当によると、できるだけテニエルの挿絵に忠実に行われたとある<sup>61</sup>。

また、この番組撮影時のバックステージ映像が残されており<sup>62</sup>、そこから舞台との違いも少なからず判る。

- ・ 不思議の国の登場人物の衣装は、基本的にテニエルの挿絵に忠実である。ただ、色遣いは舞台版よりも自然な色合いにされている。
- ・ 鏡を抜ける際、原作にある、霧のような状態は、鏡の上から下りてくる煙によって表現されている。
- ・ 白兎については、俳優が演じるものの他に、パペットで動かすものがあった。つまりアリスの身長の変化を、身長が違う二人の俳優で表現するのではなく、俳優と人形で表現している。
- ・ *The Walrus and the Carpenter* の牡蠣は黒い背景の隙間から数人の操者が手を出して、片手で操作する形のパペットで表現されている。舞台での1フットというサイズよりは小さい<sup>viii</sup>。よって、この部分はセイウチと大工は人間、牡蠣はパペットということになる。
- ・ 上記の白兎、牡蠣のパペットと、チェシャ猫の繰演は、海亀フーを演じたバー・ティスルトロム (Burr Tillstrom; 1917-1985) が行っていた。
- ・ 公爵夫人の抱く赤ん坊は口の開け閉めの出来る人形で、公爵夫人が腹話術人形のように遣っている。
- ・ トゥイードルダムとトゥイードルディーの近くで赤の王が眠っている映像がある。上記俳優一覧とともに、舞台でのハートの王が原作通り赤の王に修正されたことが判る。
- ・ 女王アリスの晩餐会に白の騎士、ハートの女王、公爵夫人、グリフォン、海亀フーが出席しているのが判る。これらは1932年の脚本とも1960年版の脚本とも違っている。テレビ独自の脚色であろうが、1982年の舞台でも公爵夫人がこの場面に登場することから考えると、この時の脚色が1982年の公演で取り入れられた可能性がある。

こうやって制作されたテレビ・ムービーは力作ではあったようだ。ただ、手放しの

---

<sup>viii</sup>黒バックの前で人形を動かすというのは、後にテレビシリーズの『トッポ・ジージョ』でも、より洗練された形で行われている。人形を操る手が見えず、人形だけが動いているように見える。ただ、黒バックの部分に背景を合成した可能性もある。牡蠣同様、チェシャ猫も黒バックで撮影されている。

成功であったわけでもなさそうである。放映翌日の *New York Times* では、以下のよう  
に書かれている。

Miss Barber was the proverbial picture of Alice; Mr. Evans recruited the best of supporting companies and spared no expense in costuming and production. Under the circumstances, there should be nothing but cheers this morning. Unfortunately, there must be a sigh of disappointment.

Somewhere amid all the earnest efforts the gently humorous spirit of Lewis Carroll was inadvertently overlooked. Little Alice was largely deprived of her adventure. Instead of finding Wonderland she was all but overwhelmed by it. Just what went wrong can only be a viewer's uninformed guess, but judging from the screen it seemed that perhaps the production consciously tried to be funny, which took most of the nonsense and fun out of Mr. Carroll's work. Where "Alice in Wonderland" should have been ethereal in quality, too often it was only literal.<sup>63</sup>

他にも、放映時間の都合で様々な場面が舞台版からカットされたが、それも災いした。見ている側にすれば、筋立てがなくエピソードの羅列に映ってしまったのだ<sup>64</sup>。しかし、その中でも高い評価を受けたのが白の女王を演じたガリエンヌである。

Eva Le Gallienne played the White Queen and easily stole the honors. In acting in complete sincerity, she gave dimension and credibility to her scene, which were instantly reflected most winningly in Miss Barber's work. Miss Le Gallienne, of course, is a veteran of Lewis Carroll's. Her stage production of "Alice" ranks among an elder viewer's fondest memories.<sup>65</sup>

必ずしも失敗というわけではないが、課題を残した作品とはいえよう。

## 1982 年の再演

初演の 50 年後、*Alice in Wonderland* は、三度目の上演を果たす。Civic Repertory Theatre 開場 54 周年として企画された。1982 年の報道時点で予算は 175 万ドル、10 月 26 日初日の予定であった<sup>66</sup>。この報道の際、話題になったのはガリエンヌが再び白の女王として宙乗りを行うかということであった。

.... In 1932, Miss Le Gallienne did all the wire work at the Civic Repertory Theater; she "flew." Will she fly again? "Carroll does describe the White Queen as being blown in by the wind," Miss Le Gallienne says. "I haven't very much choice."<sup>67</sup>

ただ、舞台については、全く新しいものになるとも報道されている。

.... This "Alice" will be a new production, of course; the 1932 set, for example, was a cyclorama by Irene Sharaff that unrolled across the stage. But esthetics and technology march on, and it is unlikely that John Lee Beatty, who will design the new set, will use a cyclorama. Still, the new production will be faithful to the old, which, in turn, was faithful to Lewis Carroll and the original John Tenniel drawings.<sup>68</sup>

実際の公演では、子豚は 1932 年の公演同様本物の豚をステージに上げ<sup>69</sup> 70、舞台装置も見どころの多いものであった。

Patricia Zipprodt has fashioned the towering dodos, ducks and eaglets after Tenniel and then taken the time to give Humpty Dumpty mobile eyebrows that can arch wisely and lower ominously. And John Lee Beatty has created a diorama that endlessly unrolls delicately drawn landscapes and seascapes and thatched huts and palaces.<sup>71</sup>

この公演でアリスを演じるのはケイト・バートン (Kate Burton; 1957-) である。また、この舞台には振付 (Movement) として、1947 年にアリスを演じたバンビ・リンも参加している。ガリエヌへの敬意でもあろう、*New York Times* は、ガリエヌに的を絞った記事を掲載する<sup>72</sup>。いわば「鳴物入り」で紹介された舞台であった。そして 1982 年 12 月 23 日にこの公演は初日を迎える<sup>73</sup>。

だが、この公演は無残な失敗に終わる。初日についての劇評は非常に厳しい<sup>74</sup>。舞台装置や衣装、セイウチや大工、牡蠣の人形については高く評価されているが、それ以外は、ガリエヌ演じる白の女王を除けば見るべきものがないとまで評されている。

.... Even the beautiful physical trappings can't long prevent us from noticing that the current incarnation of "Alice in Wonderland" is lifeless nearly from beginning to end.<sup>75</sup>

主役のケイト・バートンが槍玉に上げられる。熱演は認めるものの想像力の欠如と技術不足が指摘される。続いて舞台と脇役陣も批判される。こちらは相当に厳しい。

The other mishaps have to do with the staging and the supporting cast. Except for the puppets, a cameo appearance by a trained pig and Miss Le Gallienne's airborne arrival, there are no surprises the entire evening. Nearly every scene is identical: the lights come up to reveal Mr. Beatty's and Miss

Zipprodt's imaginative handiwork, and then the whole tableau remains frozen in place for a seeming eternity, like a department store window, until it's time for the next set to glide on.

The actors rarely move: they just model the costumes. And while they do indeed speak the famous Carroll words, they do so in a remote, disembodied way, as if the audience were not being invited to travel through the looking glass, but instead to look at Wonderland under the looking glass. The show isn't 20 minutes old before one is consulting the Playbill to count up how many scenes there are to go before it's time to go home. Children in the audience may well opt for sleep.<sup>76</sup>

一言でいえば、退屈な舞台になってしまっていたのだ。かくてこの公演は、翌週には切符を値下げすることになってしまう<sup>77</sup>。

原因としてキャスティングのミスが指摘されている。

But, knowing full well that Lewis Carroll's verses ("Father William," "The Walrus and the Carpenter," the White Rabbit's letter, and so on) were all set to music by Richard Addinsell, director Le Gallienne has inexplicably hired no singers at all. Thus the fetching rhymes croak by and are lost. Nor is the acting proper any more satisfactory. Miss Burton makes a heroic effort to get her points across the orchestra pit and out into the auditorium, but her colleagues seem still in the early-rehearsal stage, tentative and muffled. Sporadic attempts at visual comedy - the croquet game with flamingos for mallets, the tussle to get a helmet off the head of the White Knight - are wan indeed, as the verbal comedy is mostly illtimed<sup>78</sup>.

ミュージカルで、歌手ではない俳優を使えば、結局は歌も中途半端なら演技も中途半端になってしまう。1933年のパラマウントが避けた陥穽に、ガリエンヌ自身が落ちてしまったのだ。すでにキャスティングの段階で失敗は予想できたのかもしれない。かくてこの舞台は1983年1月9日を最終日として公演を終了した<sup>79</sup>。唯一の慰めは、この舞台が同年のトニー賞の衣装デザイン賞にノミネートされたことであろうか。

過去二度の公演が好評に終わったのに、なぜこの時は失敗したのか。1930年代と1980年代のアメリカ人の観客の感覚の変化に原因を求める人もいる<sup>80</sup>。一方、ガリエンヌの伝記作者 Helen Sheehy は失敗の原因を、ガリエンヌがすべて自分でやる羽目になった、そして本人もそれができると信じた点にあるとしている。プロデューサーやスタッフが経験に乏しかったのだが、83歳にもなって、それは無茶であった、と<sup>81</sup>。しかし、それだけではなく、もっと大きな理由があったように思われる。1982年の公演が失敗した理由、それは、恐らくこの公演がガリエンヌ自身の劇団によるものでは

なかったからであろう。Civic Repertory Theatre にしろ American Repertory Theatre にしろ、ガリエンヌを中心にして活動していた一座である。俳優は気心が知れているし、何ができるかもちゃんと把握出来ている。1947年の主役バンビ・リンは外様であるが、劇団の面々が脇を固めているから心配ない。しかし今度は勝手が違った。全く新しい一座を立ち上げて公演するのである。このハンデは無視できるものではない。この条件の違いが、結果として練習不足を生み、公演の失敗へといたったのではないか。

この公演が、ガリエンヌが白の女王を演じる、最後の舞台となった。

この舞台の舞台写真<sup>82</sup>から、一点、1977年改訂として出版された脚本から改訂の行われている部分が判る。女王アリスの晩餐会だ。1977年に出された脚本では、晩餐会の出席者は羊、三月兔、ヤマネ、帽子屋、白の女王、赤の女王、白の騎士、トゥイードルダムとトゥイードルディーが記載されている。しかし舞台写真ではそれらに加え、ハートの王と女王、ジャック、ハートの4と9、公爵夫人、(おそらく)料理人、蛙の伝令、鷲の仔、インコが出席しているのが判る。

### 1983年のテレビ・ムービー *Alice in Wonderland*

1982年の再演を受けて、テレビ番組 *Great Performances* の中でこの劇が放映された(1983年10月3日<sup>83</sup>)。主演のケイト・バートンは1982年の公演に引き続いて出演しているが、他のキャストは一新されている(父親のリチャード・バートンが白の騎士役で主演している)。番組は、ガリエンヌの戯曲を下敷きに、放映時間に合わせて短縮し、新たな解釈を加えた上で、すべてスタジオで撮影している。

キャストが一新したことと新たな解釈を加えたと書いたが、この番組はガリエンヌが監督したものではなく、出演もしていない。ガリエンヌ脚本の劇の一連の流れの中で、これだけがガリエンヌの手から離れているといえる。そして、この番組は、ガリエンヌ生前に演じられた劇の中で、唯一彼女が白の女王を演じていない劇といえる。

脚本は1977年改訂版に近いものを使用していると思われる。1932年版と同じ科白が使用されているのは、(劇でいえば)第二部冒頭、赤の女王がアリスから去ってゆく際のアリスと白の女王の科白、それとハンプティ・ダンプティとアリスのやり取りでの、アリスの年齢をめぐるやり取り(ただし、かなり短縮されている)、Jabberwockyの解説、それに、ハンプティ・ダンプティと別れる前後の会話くらいである。

では、具体的に戯曲とどれくらい違っているか見てみよう。個々の科白については、場面ごとに大幅に削除されているので、ここでいちいち取り上げることはしない。ここでは場面の削除、移動と、テレビ化に際し変更のあった部分を取り上げることにする。

序曲はカット。冒頭、劇場の舞台裏が映し出される。『不思議の国のアリス』の舞台の上演直前にトラブルが発生している。主演女優が練習不足なのだ。場面が変わって



アリス役の女優の楽屋。彼女はまだ科白が入っていないのか **Jabberwocky** を何度も暗唱しようとする。そこへ「あと 20 分です」の声、女優はパニックに襲われる。

女優は気づくとアリスの姿になり、楽屋の鏡を抜けていた(以降、「アリス」と呼ぶ)。鏡の向こうは居間になっている。そこへ兎が現れる。声をかけると兎は手袋と扇子を放り出して逃げ出し、アリスは近くのテーブルの上に「**Drink me**」と書かれた札のついた瓶を見つける。中味を飲むとアリスは小さくなり、涙の池に落ちる。「**Eat me**」のケーキで大きくなるくんだり扇子で再び小さくなるくだりはない。

涙の池でアリスは鼠に出会い、上陸。鼠と二人の舞台上「尾話」を聞く。**Caucus race** の場面はカットされている。

白兎に再会し、その後青虫に出会うが、ここで暗唱される **You are old, Father William** は第二連までに短縮。また、脚本では 1932 年版も 1977 年版もアリスが舞台に残り、青虫が退場するのだが、番組では青虫が画面に残って、アリスが立ち去る。

その後公爵夫人の家、森の中でのチェシャ猫との再会、気違いお茶会と続くが、お茶会ではヤマネの話す井戸の底の三姉妹の話が丸ごとカット。

女王のクロケータ場の場面では公爵夫人の再登場はない。海亀フーの場面では、ロブスターのカドリールと **Beautiful soup** の歌は、それぞれ一番のみ。

裁判の場では、アリスとハートの王、三月兎の間の「**Nobody**」をめぐる会話(これもアリスの「**I love my love with an H**」以下のやり取りがカットされている)と白兎が起訴状を読み上げる部分が入れ替わっている。帽子屋も原作や戯曲と違い、ハートの女王の「首を斬れ」の命令で兵士に連れて行かれる。1977 年版同様、料理人の証言の場面はない。裁判の最後、アリスが「あんたたちなんかトランプじゃない！」の科白でトランプたちが襲い掛かるのは 1977 年版に準拠しているが、その後テニエルの同場面の挿絵が映し出され、アリスが逃げ出す場面はない。

幕間にあたる場面では、再び楽屋が映し出される。アリスは鏡の向こうに行っているので無人。そこへ「あと 15 分です」と声がかかる。画面は鏡の横に貼ってあったテニエルの挿絵、アリスと赤の女王が会話している絵をアップで映し出し、それが劇の場面へと変わる。

アリスと赤の女王の会話から劇は再開。赤の女王が去った後、列車にアリスが乗っている場面がカットされて、トゥイーデルダムとトゥイーデルディーの場面になる。**The Walrus and the Carpenter** では、科白の分担は 1932 年版とも 1977 年版とも違っている。眠っているハートの王を見る場面は、1977 年版同様、ない。二人と別れたアリスのところへショールが飛んで来て、それを追いかけて白の女王が走って登場する。白の女王が去った後、羊の場面はなく、ハンプティ・ダンプティの場になる。

ハンプティ・ダンプティと別れた後、白の騎士に会い、戴冠、二人の女王による試験となる。女王たちが眠ってしまうとアリスの目の前に門が現れる。ここでは 1932 年版の門番も、1977 年版の白兎も出て来ない。その後パーティーでの食べ物に紹介される場面も乾杯の合唱もなく、女王アリスにスピーチを求める場面となる。すぐにアリスが赤の女王を揺さぶり、再び舞台は楽屋となる。そこにはアリスの衣装を着た女優

がいる。赤の女王が変身する筈の猫は出て来ない。

最後、舞台の安楽椅子に座ったアリス(女優)が *Jabberwocky* を暗唱して幕となる。

一見して明らかであるが、ガリエンヌの脚本がキャロルの作品の忠実な舞台化を理想としていたのに対し、この版ではそれを「アリスを演じる女優の、夢とも現実ともつかない経験」という形に改変している。元々枠物語の構造を持っていた脚本に、さらに枠を作って作品を囲ってしまったといえよう。そして、劇中の物語について「さあここから『鏡の国のアリス』ですよ」と視聴者に知らしめるため、幕間でのテニエルの絵の拡大という手法が出て来る。しかし、これによりガリエンヌが劇に取り入れた、二つの『アリス』物語を一つにするという工夫が無視され、単に二つの物語を並べただけの劇になってしまった。ガリエンヌの上演では、1932年版も1947年版も、裁判の後、アリスはその場を逃げ出す。そこで一旦幕となり、次の幕が開くと赤の女王に会うところから始まるが、劇中ではアリスは裁判を逃げ出して、道に迷ったところを赤の女王に会うという形で、時間的につながっている。そこが眼目であるのは、1947年のレコード版で、全体を大きく削除しているながらも、裁判と赤の女王に会う間については、ちゃんとナレーションで説明していることから明らかである。しかしこの番組では、裁判でアリスが逃げる場面のないことから、二つの物語は全くつながりを持たなくなっている。

また、「アリスを演じる女優」という脚色のため、本来なら鏡を抜けてすぐに読まれる *Jabberwocky* が、劇の最後で朗読されることになった。結果として劇ではまだ完全に暗唱されていないこの詩の解説をアリスがハンプティ・ダンプティに求めることになってしまっている。また、もともとの劇では、この詩はミュージカルナンバーとして歌われる。しかし劇の最後の場面で、アリスはこの詩を暗唱するだけになってしまっている。

ガリエンヌの脚本からの逸脱は他にもある。ガリエンヌ自身はアリスの夢を表すため、劇が切れ目なしに続くように考えて舞台装置を作った<sup>84</sup>が、それはテレビや映画の、カットを積み重ねることで表現する技法と相性が悪く、改変する必要がある。しかし、場面転換に際しガリエンヌは、アリスが常に舞台にいるということを求めていた<sup>85</sup>。だが、青虫との場面の後、アリスは舞台から立ち去る。アリスの存在しないアリスの夢とは、どういうものであろうか。

登場人物の扮装についても、舞台劇とは違っている。テニエルの絵をそのまま模した衣装やぬいぐるみは、実際にそのまま再現されているのだが、舞台では白兔や鼠など、「被り物」を被る役では被り物で芝居が行われる。しかしこの番組の場合、最初に被り物で現れ、衣装を視聴者が認識したと考えられた時点で、役者が顔を出して演技するようになる。ハンプティ・ダンプティとチェシャ猫に至っては、テニエルの絵のままの姿で現れ、次に顔の部分が役者の顔に合成され、そして最後に人間の姿で現れる。この番組の元となった1982年の公演の劇場パンフレットでは、この二つの配役には「(Voice)」と但し書きがある<sup>86</sup>にも関わらず、である。

配役についても舞台劇の方針と違っている点がある。公爵夫人、料理人、ハートの女王をこの番組では女優が演じているのだ。この三役を男性が演じることについて、ガリエンヌは大いにこだわっていたのだが、ここではそれが無視されている。

また、特殊効果についても、ガリエンヌの本来の劇から逸脱している部分が見られる。アリスの前に現れる小さな白兎や、瓶の中味を飲んで小さくなる場面で光学合成を使うことや、トランプが襲ってくる場面で本当にトランプを飛ばすというのは、テレビで放映する以上、妥当な手法であり、こういうものは逸脱ではないのだが、**The Walrus and the Carpenter** では、この番組ではマリオネットによるセイウチと大工、パペットによる牡蠣を出していない。ただただトゥイードルダムとトゥイードルディーが踊りながらこの詩を歌うだけで、詩の内容は可視化されない。また、白の女王の登場と退場も、単に走っての登場、走っての退場であり、ガリエンヌの考案した宙乗りは使われていない。この二つは、もともとの劇の楽しさをわざわざ削除したと考えざるを得ない。

また、本編を短くするために、もとの劇のミュージカルナンバーをことごとくカットしている。実際に、この番組で歌が歌われるのは鼠の尾話<sup>ix</sup>、公爵夫人の子守歌、**Twinkle, twinkle, little bat** の一部<sup>x</sup>、ロブスターのカドリアルと **Beautiful Soup** の、それぞれ原曲の半分、**The Walrus and the Carpenter**、**A Sitting on the Gate**、赤の女王の子守歌だけである。本来アリスの歌う **Jabberwocky** を朗読させていることから、主人公であるアリスが全く歌わない上に、ほとんど歌が収録されていない。加えてこの番組では本来の劇にあった劇判音楽の演奏がない。とてもミュージカルとは言えない仕上がりになっている。

もう一点、レコードと比較すると、こちらの会話のほうが、聴いている人間に緊張感を与えるように感じられる。映像もそれを助長するように見える。

この番組を制作する **WNET-TV** は、1982年の舞台のテレビ化の権利を持つ代わりに、この舞台に多額の投資を行っていた<sup>87</sup>。権利料は 52 万ドルにも及ぶ<sup>88</sup>。しかし、初演 50 年の年であるこの舞台公演は大失敗に終わった。そこで、テレビ番組を制作するに当たって脚本を根本から見直した。

"We took the script and edited what didn't work," said Jac Venza, executive producer of the TV show, "and we got a more important American subtext. The polite 19th-century English thing was boring."<sup>89</sup>

---

<sup>ix</sup> この曲については、1947年再演時のものであると考えられるアディンセルのピアノ／ヴォーカルスコアにない。1982年再演時に音楽の編曲、監修をしたジョナサン・チューニック (Jonathan Tunick; 1938-) によるものと考えられる。DVDのスタッフ表示には「**Music by Richard Addinsell & Jonathan Tunick**」とある。

<sup>x</sup> これもアディンセルのピアノ／ヴォーカルスコアにない。ただ、これについては普通に「きらきら星」のメロディが使われていて、ミュージカルナンバーというわけではないと考えられる。

Putting the entire television enterprise into the skillful directorial hands of Kirk Browning, the producers, Mr. Venza and Ann Blumenthal, have also enlisted the aid of Donald Saddler, the choreographer, and have devised a new framework for the play. The action now starts backstage as an understudy for the title role is being told that she has to go on. Sitting at her dressing table and frantically puffing on a cigarette, she drifts off into her own fantasy that manages to combine the personalities of the acting company with the characters in "Alice in Wonderland."<sup>90</sup>

総じてガリエンヌとは全く違った感性のもとに、ガリエンヌの脚本を解釈しなおし、おそらくは1982年上演のものとは全く違ったもの、大人「だけ」が観る劇として作られたとあってよいのではないか。

.... This is still not a great "Alice," a work that has often shown itself resistant to theatrical adaptation, perhaps because its basic punning roots are so literary. This "Alice" is a series of sketches, many marvelously executed, which convey some idea of what can be found in the original Lewis Carroll. Younger viewers, especially, should be delighted.<sup>91</sup>

だが、それはガリエンヌの脚本を全く別のものにしてしまったともいえる。ガリエンヌが作った劇を書き換えた上で、白の女王からも締め出して作られたこの番組は、1933年のパラマウント映画と比較しても、ガリエンヌの精神からは遠いところにあるといえよう。

この1983年の番組以降、劇 *Alice in Wonderland* はガリエンヌの生前に再演されることはなかった。

## 結論

以上、ガリエンヌによる劇 *Alice in Wonderland* の特色、影響、そして上演歴と他メディアへの進出を見てきた。その内容を簡単に記すと次の通りである。

ガリエンヌとフリーバスの執筆による劇 *Alice in Wonderland* の特徴として『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』をない交ぜにすることなく、しかも両者の物語を有機的に結び付けた点がある。そして、裁判の場面で、女王だけではなく不思議の国の登場人物たちに「首を斬れ」と言わせるという点で、後の映画の最終場面の嚆矢となっている。

劇はさまざまな特殊効果が使われているが、特に白の女王は宙乗りを行っていた。そして、その宙乗りとともに、この役はガリエンヌの持ち役となった。

劇は1932年にジョセフィン・ハッチンソン主演で上演され、その後1947年の再演ではバンビ・リンが主演、1982年の再演ではケイト・バートンが主演している。再演

は、評価は高かったものの興行的には失敗、再々演は、完全に失敗となった。しかし、1933年のパラマウント映画『不思議の国のアリス』は、この劇に影響を受け、劇を下敷きにしたような映画作りをしていた。劇そのものも1947年にレコードとして録音され、1955年にはテレビ・ムービーとして放映された。また、ガリエンヌを排した形ではあるが、1983年には再度テレビ・ムービー化される。

キャロルの『不思議の国のアリス』や『鏡の国のアリス』を演劇化したものは過去にも多く、再演の回数でいえばこれを超える演劇もあると思われる。また、上演回数でもこれを超えるものはあると思われる。しかし、初演50年後に再演され、なおかつ、その中の一つの役を同じ俳優が演じるというのは、古典演劇ならともかく、新作演劇では非常に珍しい。そして、その劇における原作の脚色は、後の映画やテレビドラマにも影響を与えた。直接的な影響では、すでに最初の公演の直後にパラマウント映画がこの劇を下敷きにして映画を製作している。また、この劇そのものもレコードやテレビドラマという、新たなメディアへと進出している。最後の公演に失敗し、その翌年にはガリエンヌ自身が外れた形でテレビ・ムービーが制作されるという必ずしも有終の美を飾れずに終わってしまったこの劇ではあるが、『アリス』受容史の上で、また、演劇になった『アリス』の歴史の上で、非常に大きな足跡を残した作品であるといえよう。

付録 1. 配役一覧

	1932	1947	1947	1955	1982	1983
	舞台劇	舞台劇	レコード	テレビ・ムービー	舞台劇	テレビ・ムービー
Alice	Josephine Hutchinson	Bambi Linn	Bambi Linn	Gillian Barber	Kate Burton	Kate Burton
White Rabbit	Richard Waring	William Windom	William Windom	Martyn Green	Curt Dawson	Austin Pendleton
White Rabbit	Freddy Rendulic, Doris Sawyer	Julie Harris			Mary Steuart Masterson (Small White Rabbit)	
Mouse	Nelson Welch	Henry Jones	Henry Jones		John Remme	Nathan Lane
Dodo	Joseph Kramm	John Straub	John Straub		James Valentine	
Lory	Walter Beck	Angus Cairns	Angus Cairns		John Miglietta	
Eaglet	Martin Pollock (脚本では Robert H. Gordon)	Arthur Keegan	Arthur Keegan		Rebecca Armen	
Crab	Whinter Bissell (脚本では Landon Herrick)	Don Allen				
Duck	Burgess Meredith	Eli Wallach	Eli Wallach		Nicholas Martin	
Caterpillar	Sayre Crawley	Theodore Tenley	Theodore Tenley	Noel Leslie	John Heffernan	Fritz Weaver
Fish Woodman	Tonio Selwart	Ed Woodhead	Don Allen	Michael Enserro	Geddeth Smith	
Frog Footman	Robert F. Ross	Robert Rawlings	Robert Rawlings	Gilbert Mack	Claude-Albert Saucier	

	1932	1947	1947	1955	1982	1983
Duchess	Charles Ellis	Raymond Greenleaf	Raymond Greenleaf	Bobby Clark	Edward Zang	Kay Ballard
Cook	Howard Da Silva	Don Allen	Don Allen	Bernard Tone	Richard Sterne	
Cheshire Cat	(脚本では Florida Friebus)	Margaret Webster(a), Donald Keyes(b, c),	Margalet Webster	( <i>New York Times</i> では Burr Tillstrom)	Geddeth Smith (Voice)	Geoffrey Holder
March Hare	Donald Cameron	Arthur Keegan	Arthur Keegan	Robert Casper	Josh Clark	Željko Ivanek
Mad hatter	Landon Herrick	Richard Waring	Richard Waring	Mort Marshall	MacIntyre Dixon	Andre Gregory
Dormouse	Burgess Meredith	Theodore Tenley(a,c), Don Allen(b),	Theodore Tenley	Alice Pearce	Nicholas Martin	
Two of Spades	David Marks	Eli Wallach			Geoff Garland	
Five of Spades	Arthur Swensen	Robert Rawlings			Robert Ott Boyle	
Seven of Spades	Whinter Bissell	Donald Keyes			Steve Massa	
Gardener				Skedge Miller		
Queen of Hearts	Robert H. Gordon (脚本では Joseph Schildkraut)	John Becher	John Becher*	Ronald Long	Brian Reddy	Eve Arden
King of Hearts	Harold Moulton	Eugene Stuckmann	Eugene Stuckmann	Hiram Sherman	Richard Woods	James Coco
Knave of Hearts	David Turk	Frederic Hunter	Eli Wallach	Tom Bosley	John Seidman	Tony Cummings

	1932	1947	1947	1955	1982	1983
Gryphon	Nelson Welch	Jack Manning	Jack Manning	J. Pat O'Malley	Edward Hibbert	Swen Swenson
Mock Turtle	Lester Sharef	Angus Cairns	Angus Cairns	Burr Tillstrom	James Valentine	Donald O'connor
Clubs	Jacobsen, Lloyd, Green, Simonson	John Behney, Bart Henderson, John Straub, Thomas Grace*			Skip Harris, Cliff Rakerd*	
Hearts	Tittoni, Ballantyne, Cotsworth, Pollock, Fox, Scourby, Milne, Marsden, Leonard	Don Allen, Robert Carlson, Michael Corham, Will Davis, Robert Leser, Gerald McCormack, Walter neal, James Rafferty, Dan Scott, Charles Townley			Geddeth Smith, Rebecca Armen, John Remme, Mary Steuart Masterson, Claude-Albert Saucier, Marti Morris, John Miglietta, Nancy Killmer, Richerd Sterne, John Heffernan**	



	1932	1947	1947	1955	1982	1983
Cards						Dean Badolato, Bill Badolato, Mercedes Ellington, David Gold, Frantz Hall, Dirk Lumbard, Robert Meadows, Kirby Tepper,
Red Chess Queen	Leona Roberts	Margalet Webster	Margalet Webster	Elsa Lanchester	Mry Louse Wilson	Collen Dewhurst
Train Guard	Robert H. Gordon	John Straub			Nicholas Martin	
Gentleman Dressed in White Paper	Robert F. Ross	William Windom			Geddeth Smith	
Goat	Richard Waring	Don Allen			Claude-Albert Saucier	
Beetle	(脚本では Florida Friebus)	Donald Keyes (Beetle voice)				
Horse Voice	(脚本では David Turk)					

	1932	1947	1947	1955	1982	1983
Gnat	(脚本では May Sarton)	Cavada Humphrey (Gnat voice)				
Gentle Voice	Agnes McCarthy	Angus Cairns				
Other Voices		Mary Alice Moore, Eli Wallach				
Tweedledum	Landon Herrick	Robert Rawlings		Ian Martin	Robert Ott Boyle	Andre De Shields
Tweedledee	Burgess Meredith	Jack Manning		Don Hanmer	John Remme	Alan Weeks
Red King				Don Somers		
White Chess Queen	Eva Le Gallienne	Eva Le Gallienne	Eva Le Gallienne	Eva Le Gallienne	Eva Le Gallienne	Maureen Stapleton
Sheep	Margalet Love	Theodore Tenley			John Heffernan	
Humpy Dumpty	Walter Beck	Henry Jones	Henry Jones	Karl Swenson	Richard Woods (Voice)	Richard Woods
White knight	Howard Da Silva	Philip Bourneuf	Hugh Franklin	Reginald Gardiner	Curt Dawson	Richard Burton
Horse (Front Legs)	Wm. S. Phillips (脚本では Robert F. Ross)	Will Davis			Josh Clark	
Horse (Back Legs)	David nathan (脚本では Wm. S. Phillips)	Charles Townley			Cliff Rakerd	

	1932	1947	1947	1955	1982	1983
Old Frog	(脚本では Sayre Crawley)	Donald Keyes(b,c)			Edward Hibbert	
Shrill Voice	(脚本では Adelaide Finch)	Angus Cairns(b,c)				
Singers	Ruth Wilton (脚本 では Ruth Wilton, Adelaide Finch)	Eloise Roehm, Mara Lunden (a), Eloise Roehm, Rae Len (b,c)			Nancy Killmer	
Voice of Leg of Mutton					Steve Massa	
Walrus				Marc Breaux		
Carpenter				Lenny Claret		
Narrator			Eva Le Gallienne	Maurice Evans		
出典	Playbill 1933 (New Amsterdam Thatre), 1932 年 脚本(Civic Repertory Theatre)	Playbill 1947、脚 本 (1977 版の復刻 版)	CD (Must Close Saturday Records; MCSR3012) ライ ナーノート	Internet Movie Database, <i>New York Times</i> 1955 年 10 月 24 日号	Playbill 1982, <i>New York Times</i> 1982 年 12 月 24 日 号	DVD クレジット
		*順にクラブの 3,5,7,9	*ライナーノート の表記は John Beecher		*順にクラブの 3,7	

1932	1947	1947	1955	1982	1983
	キャストに異同の あるものは(a) Playbill 1947 (International Theatre 木下蔵 書)、(b)Playbill 1947 (International Theate www.PlaybillVaul t.com 掲載のも の)、(c)脚本掲載の もの			**順にハートの A-10	

## 付録 2. ガリエンヌの *Alice in Wonderland* 脚本比較

刊行されたガリエンヌの脚本は、大きく二種類ある。一つは 1932 年の初演後に出されたもの。もう一つは改訂版として、1947 年の再演後に出されたものである（扉に「As presented by Rita Hassan and the American Repertory Theatre, April, 1947」と書かれている）。ガリエンヌはその後、1947 年版をベースに 1948 年、1949 年、1960 年、1976 年、1977 年と「改訂」され、1977 年版が現在も流通している。ただ、本文でも記したが、ここでいう「改訂」とは、著作権登録の更新のための見直しを指し、本文に修正がない場合も「改訂」とされている。1932 年版と 1947 年版の大きな違いは、1937 年版では、基本的に科白以外はト書きのみであったのに対し、1947 年版は舞台装置や舞台効果について詳細に記述されていることである。また、1932 年版には初演時（初日である 1932 年 12 月 12 日公演プログラムから）のキャストとスタッフが掲載されているのに対し、1947 年版ではそれに加えて 1947 年再演時のキャスト（公演日については記載なし）が掲載されている。

1932 年版と、1947 年版の 1960 年改訂版（以降、1960 年版）、1977 年改訂版（以降、1977 年版）における変更部分を比較してみる<sup>xi</sup>。その大きな違いは場面転換にある。1932 年版では可動式の舞台装置を使って各幕の中での場面転換が途切れることなく移ってゆく。これはガリエンヌの

.... I had myself devised the technical scheme of production, in which, by the use of trolley platforms and other stage devised, it would be possible to keep the entire action of the play flowing, uninterrupted by curtains or conventional scene-changes, in this way giving the effect of Alice's dream.<sup>92</sup>

という主張による。一方、1960 年版、1977 年版では可動式の舞台装置を使用することまでは同じなのだが、場面転換では基本的に暗転となっていて、暗転の間、アリスにのみピンスポットを当てている。これについては、アリスをずっと舞台に出しながらも、自分たちの劇団以外での上演の便を考慮に入れたことも大きいのではないかと思われる。

.... We feel that by the use of this book any organization with the necessary equipment at their disposal, and an adequate knowledge of stagecraft, can achieve a successful "Alice," while others not so equipped can continue, as in the past, to use their own simplified techniques.<sup>93</sup>

つまり、1960 年版、1977 年版は、舞台効果まで詳細に書かれている一方で、ガリエンヌの一座による上演とは離れている可能性もあるということである。ここでは細かい科白の異同までは比較せず、会話の構成に影響のある異同のみをチェックした。

<sup>xi</sup> 比較に使用したテキストは以下の通り。

Le Gallienne, Eva. *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French 1932

Le Gallienne, Eva. *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French, 1960

Le Gallienne, Eva. *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French, 1977 (Reprint)

ページ番号は 1932 年版

ページ	変更点
8	1932 年版にはなかった、「自分は誰に変わってしまったのか」というアリスの自問自答と How doth the little crocodile が 1960 年版以降では追加される。
11	上陸後のインコの科白が 1960 年版以降ではカットされる。
12	無味乾燥な話。1932 年版では「found it advisable」以降もそのまま鼠は話し続けるが、1960 年版以降では原作に出てくる「Found what?」に始まる「it」を巡るやりとりが挿入される。
16	鼠が怒って去ってしまう際、アリスと他の登場人物達が引き留める科白が 1960 年版以降ではカット。(1947 年録音のレコードではこの部分は存在している)
16	鼠の去った後の蟹親子の会話も 1960 年版以降ではカットされている。
17	アヒルの「I really must be getting home; the night-air doesn't sit my throat!」の科白が、1960 年版以降ではインコが話すように変更。
29	アリスの「I've seen Hatters before....」の科白が 1960 年版以降ではカット。
31	1932 年版では帽子屋「Do you mean you think you could find out answer to it?」、アリス「I do. At least——at least I mean what I say. That's the same thing, you know.」となるが、1960 年版以降では、この二つの科白の間に、原作通りアリスと帽子屋のやりとりがある。
44	クロッカーをしている間の科白としてト書きに入っている科白が 1960 年版以降ではすべてカット。それに続くアリスの「They're dreadfully fond of beheading people here....」の科白もカット。
51	海の底の学校での四則計算の話の後、1960 年版以降ではアリスの「What else did you have to lean?」に始まる、他の授業の紹介をすべてカット、一日の授業時間の話まで飛ぶ。
53	ロブスターのカドリールをグリフォンと海亀フーが説明する部分が、1960 年版以降ではほとんどカットされている。
55	Will you walk a little faster の歌が、1960 年版以降では二番をカット。
59	1932 年版では Beautiful soup の歌が一番だけなのに対し、1960 年版以降ではフルコーラス歌われる。その代わりにグリフォンの「Chorus again!」の科白と、海亀フーの歌い出しの部分がカット。
60	ト書きの陪審員が 1932 年版ではヤマネ、青虫、ドードー、インコ、蟹、蛙と魚の伝令、鼠、三人の園丁、ハートの A。傍聴人が公爵夫人、刑吏、ハートの 2,3,4,5,6。それに対して 1960 年版以降では陪審員はアヒル、ヤマネ、蛙と魚の伝令。傍聴人は公爵夫人と料理人。
62	1960 年版以降では、アリス「I beg your pardon?」、ハートの王「It isn't respectable to beg」に続くアリスとハートの王の科白がカット。

ページ	変更点
63	ハートの王が途中追い越した者はいるかと三月兎に訪ね、三月兎が「Nobody」と答える。それにハートの王が「...Nobody walks slower than you」と言ったのに対して三月兎が抗弁するが、1960年版以降では抗弁の科白とハートの王の返事がカット。
67-68	証人として公爵夫人の料理人の出てくる部分が1960年版以降ではカット。
74	1932年版ではアリスが「Who cares for you! You're nothing but a pack of cards!」というハートの女王が「Off with her head! Off with her head!」と言い、アリスはその場から逃げる。1960年版以降ではアリスの科白の後、暗転。幻灯によってランプがアリスへ飛びかかるのを映写、アリスは払い落とそうとするが、右に回って逃げる（居所で）。
81	赤の女王とアリスが別れる際、1932年版では赤の女王が「Good-bye」と言って去り、アリスは「She can run very fast」と驚くが、1960年版以降では両者の科白の順序が入れ替わっている。
81	1932年版で列車の中の「多くの人の声」が話す科白が、1960年版以降では白い紙の服を着た紳士と「声」の割台詞になる。
82	同じ場面。1932年版では「全員の声」とされる一連の科白が1960年版以降では「優しい声」と「声」、「別の声」と「声」、「甲虫の声」と「声」の、それぞれ割台詞になっている。
83-84	「しゃがれ声 (Hoarse voice)」の科白の後、アリスと蚊のやりとりの部分が1960年版以降ではカット。1932年版で「It's only a brook we have to jump over」の科白が1960年版以降では白い服を着た紳士の科白になっている。馬 (horse) としゃがれ声 (hoarse voice) の洒落がなくなったので、馬は1960年版以降では登場しない。
86	1932年版ではトゥイードルディーの「Contrariwise」の次にトゥイードルダムの科白があるが、1960年版以降ではアリスの科白に入れ替えられ、それに続くトゥイードルディーの科白も1960年版以降では冒頭がカットされている。それに続くアリスの科白も後半部分がカット。
86	1932年版では The Walrus and the Carpenter 冒頭をトゥイードルディーが歌い出し、アリスの科白が入った後、二人が最初から歌い出すのだが、1960年版以降ではトゥイードルディーの歌い出しがカット。
87-91	The Walrus and the Carpenter について、1932年版ではセイウチの部分をトゥイードルダム、大工の部分をトゥイードルディーが歌うと指定されていて、二人が歌う部分とそれぞれが歌う部分が科白で指定されている。1960年版以降ではそれぞれの歌う部分の指定が変更された上で、トゥイードルダムがセイウチ、トゥイードルディーが大工という分担がなくなっている。
91	歌の最後の部分、「But answer came there none....」が1960年版以降ではリフレインされる。

ページ	変更点
91-93	ハートの王（原作では赤の王）が眠っている場面が 1960 年版以降ではカット。
102	ハンプティ・ダンプティを見たアリスの科白の中の一部が 1960 年版以降ではカット。
104-105	ハンプティ・ダンプティが塀から落ちたら王の兵士と馬が総動員されるということをアリスが知っていて驚くハンプティ・ダンプティに対し、アリスが「It's in a book」と答える。そこからのアリスとハンプティ・ダンプティのやりとり（アリスの年齢について）が 1960 年版以降ではカットされていて、すぐに次の話題、アリスがハンプティ・ダンプティのネクタイをベルトに間違える話へ飛ぶ。
108	非誕生日の話の後のアリスの科白「Certainly」が 1960 年版以降ではカット。
108-109	ハンプティ・ダンプティの、言葉と自分、どちらが主人なのかという議論が 1977 年版ではカット。
109-112	Jabberwocky のハンプティ・ダンプティによる解説が 1960 年版以降では丸ごとカット。
112-113	ハンプティ・ダンプティの詩が 1960 年版以降では短縮される。
113-114	ハンプティ・ダンプティが「That's all. Good-bye」と言った後、1032 年版ではまだアリスとのやりとりがあるが、1960 年版以降ではこの科白の後暗転となる。
118	落馬した白の騎士とアリスとのやりとりで、1960 年版以降は落馬直後の科白をそれぞれ一つカット。
118-119	白の騎士の発明談義を、1960 年版以降ではカット。
120	白の騎士の、詩の名前に関する議論が 1960 年版以降では全部カット。
121-122	白の騎士の詩は 1932 年版、1960 年版以降ではどちらも原作の詩を抜粋しているが、前半部分では 1932 年版と 1960 年版以降とで抜粋する箇所が変わっている。
123	1932 年版では白の騎士と別れたアリスは「I hope it encouraged him」といい、そのまま戴冠へと進むが、1960 年版以降では「And now for the Eighth Square and to be a Queen!」の一文が追加される。
123	アリスの戴冠は、1932 年版では上記アリスの科白の後、アリスの頭に王冠が下りてくる演出だが、1960 年版以降では暗転からライトが点いた時、アリスの頭に王冠が載っているという演出に変更。
125	女王たちにアリスが試験される場面で、1932 年版にはあった「8-9」の引き算のやりとりが 1960 年版以降ではカット。
126	1932 年版にはあった割り算の試験が 1960 年版以降ではカット。
129	1932 年版では白の女王の「a set of Thursdays, you know.」との言葉に対し、アリスは「In our country there's only one day at a time」と答え、それに対して赤の女王が「That's a poor thin way of doing things....」と答えるが、1960 年版以降では赤の女王の科白の前に、二人の女王の「Poo!」という科白が入る。



ページ	変更点
129-130	夜が五つあると、一晩の五倍暖かいのかと訊くアリスに赤の女王がその通りと答える。その後 1932 年版では、それなら五倍寒いともいえるのではと返すアリスと赤の女王の応対が続くが、1960 年版以降では、この「五倍寒い」に関するやりとりが削除。
132	二人の女王が眠ってしまった後、アリスは「What <i>am</i> I to do?」といい、1932 年版では女王が消えるまで科白がないが、1960 年版以降ではアリスの独白が挿入される。
132	1932 年版では「QUEEN ALICE」と書かれた入口の前で、原作通りに門番との押し問答があるが、1960 年版以降ではアリスの独白の後、白兎が「Oh my ear and whiskers! We shall be late!」と言って登場、アリスに晩餐会があると伝え、アリスを急かせる。
133	晩餐会の来賓。1932 年版では赤の女王、白の女王、動物たち、鳥たち、花々で、気まずい沈黙の中、アリスが座席に着くとあるが、1960 年版以降では暗転後、羊、三月兎、ヤマネ、帽子屋、白の女王、赤の女王、白の騎士、トゥイードルダムとトゥイードルディーと共にアリスは席に着いていて、そこへ白兎が入ってくる。
134-135	晩餐会で赤の女王がアリスにプディングを紹介した後、1932 年版では白の女王による'First, the fish must be caught....の詩が入るが、1977 年版ではカット。
136	スピーチを促されたアリスの返答とそれに対する赤の女王の返事が、1960 年版以降ではカット。
136	劇では原作では晩餐会にアリスが訪れたすぐに歌われる To the Looking-Glass world it was Alice....の歌が、アリスのスピーチに関するやりとりの後ろに移動されている。1932 年版では、全員が歌う間にアリスの独白があるが、1960 年版以降ではカット。歌の部分では、1960 年版以降は「With thirty-times three!」の行がリフレインされるよう、科白にも記載されている。

#### 引用文献

- 1 "Eva Le Gallienne to Give 5 New Plays" *New York Times* 1930 年 7 月 28 日号
- 2 Sheehy, Helen *Eva Le Gallienne: A Biography* Knopf, p.200, 1996
- 3 Sheehy, Helen *Eva Le Gallienne: A Biography* Knopf, pp.205-206, 1996
- 4 Sheehy, Helen *Eva Le Gallienne: A Biography* Knopf, p.213, 1996
- 5 "Eva Le Gallienne Comes Back to It all" *New York Times* 1932 年 9 月 11 日号
- 6 Addinsell, Richard, *Alice in Wonderland: Piano/ Vocal Score*. Samuel French, 1979
- 7 Le Gallienne, Eva. *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French, pp.7-8, 1932
- 8 Le Gallienne, Eva. *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French, 1932
- 9 Playbill: *Alice in Wonderland* (New Amsterdam Theatre) 1933
- 10 Le Gallienne, Eva. *At 33*. Longmans, Green and Co., New York, Toronto, p.245, 1934
- 11 Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York, p.69, 1953
- 12 "The Play: Eva and 'Alice in Wonderland.'" *New York Times* 1932 年 12 月 12 日号
- 13 Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York,

---

pp.240-241, 1953

<sup>14</sup> Le Gallienne, Eva. *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French, p.123, 1932

<sup>15</sup> Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York, p.47, 1953

<sup>16</sup> Le Gallienne, Eva. Forward to *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French, 1932

<sup>17</sup> "Eva Le Gallienne Comes Back to It All" *New York Times* 1932年9月11日号

<sup>18</sup> Le Gallienne, Eva. Forward to *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French, 1932

<sup>19</sup> 同上。

<sup>20</sup> DVD: *Lewis Carroll's Alice in Wonderland* (Broadway Theatre Archive) Image Entertainment

<sup>21</sup> Le Gallienne, Eva. Forward to *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French, 1932

<sup>22</sup> Greasley, Phillip A. (ed.) *Dictionary of Midwestern Literature: vol. 1 The Authors*. Indiana Univ Pr., p.219, 2001

<sup>23</sup> Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York, pp.279-280, 1953

<sup>24</sup> "Eva Le Gallienne Comes Back to It All" *New York Times* 1932年9月11日号

<sup>25</sup> "The Play: Eva and 'Alice in Wonderland.'" *New York Times* 1932年12月12日号

<sup>26</sup> 同上

<sup>27</sup> <http://www.playbillvault.com/Show/Detail/9/Alice-in-Wonderland>

<sup>28</sup> 同上

<sup>29</sup> "Alice Yields to Films" *New York Times* 1933年5月5日号

<sup>30</sup> 清水俊二「春の大作紹介 不思議の國のアリス」『新映画』昭和9年3月号

<sup>31</sup> Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York, pp.68-69, 1953

<sup>32</sup> 同上

<sup>33</sup> 同上

<sup>34</sup> "The Screen: A Pictorial Conception of 'Alice in wonderland' at the Paramount — Will Rogers's New Production." *New York Times* 1933年12月23日号

<sup>35</sup> Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York, p.276, 1953

<sup>36</sup> "'If the Shoe Fits' Arrives Tonight: In Long Run Comedy" *New York Times* 1946年12月5日号

<sup>37</sup> "Repertory Group to Change Policy: Offering of a Single Play on a 4-to-6-Week Basis Will Ease Financial Burden" *New York Times* 1947年1月23日号

<sup>38</sup> Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York, pp.276-277, 1953

<sup>39</sup> "Alice in Wonderland: Lewis Carroll's story makes a charming play with Bambi Linn as heroine" *LIFE* 1947年4月28日号 pp.97-100

<sup>40</sup> Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York, p.281, 1953

<sup>41</sup> <http://www.playbillvault.com/Show/Detail/7688/Alice-in-Wonderland>

<sup>42</sup> Le Gallienne, Eva. *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French, pp.82-83, 1932

<sup>43</sup> Le Gallienne, Eva. *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage: Revised and Rewritten*. Samuel French, p.94, 1960

<sup>44</sup> "Alice in Wonderland: Lewis Carroll's story makes a charming play with Bambi Linn as heroine" *LIFE* 1947年4月28日号 p.98

<sup>45</sup> 舞台写真は Le Gallienne, Eva. *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage: Revised and Rewritten*. Samuel French, 1960 の p.96 と p.97 の間に挿入されている。

- 
- 46 "Year-end Causerie: Fourteen of the Ten Best Plays and a Few Partisan Words About Galileo." *New York Times* 1947年12月28日号
- 47 "'Alice' to End Run Here on Saturday." *New York Times* 1947年6月24日号
- 48 同上
- 49 Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York, p.282, 1953
- 50 同 p.281
- 51 "Records: Voices Heard in the Night" *New York Times* 1948年5月23日号
- 52 同上
- 53 *Alice in Wonderland & Through the Looking-Glass*. Must Close Saturday Records; MCSR3012
- 54 Le Gallienne, Eva. Forward to *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French, 1932
- 55 "Carroll's Fun and Nonsense Elude 'Alice in Wonderland'" *New York Times* 1955年10月24日号
- 56 [http://www.imdb.com/title/tt0286450/fullcredits?ref\\_=tt\\_cl\\_sm#cast](http://www.imdb.com/title/tt0286450/fullcredits?ref_=tt_cl_sm#cast) 以降のこのドラマのデータに関する記述は、特に記載のない限りこのサイト (Internet Movie Database) に準拠する。
- 57 Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York, p.279, 1953
- 58 同 p.279-280
- 59 "England Exports an Alice" *LIFE* 1955年10月17日号
- 60 "Carroll's Fun and Nonsense Elude 'Alice in Wonderland'" *New York Times* 1955年10月24日号
- 61 Archive of American Television  
<http://www.emmytvlegends.org/interviews/shows/hallmark-hall-of-fame> 掲載のディック・スミス (メイクアップ) のインタビュー動画より
- 62 DVD *Kukla, Fran and Ollie - The First Episodes, Vol. 3* The Burr Tillstrom Copyright Trust 所収の特典映像
- 63 "Carroll's Fun and Nonsense Elude 'Alice in Wonderland'" *New York Times* 1955年10月24日号
- 64 同上
- 65 同上
- 66 "Broadway: Eva le Gallienne to Return in 'Alice in Wonderland'" *New York Times* 1982年6月4日号
- 67 同上
- 68 同上
- 69 "Stage: Tenniel's 'Alice' at the Virginia Thater" *New York Times* 1982年12月24日号
- 70 Playbill: *Alice in Wonderland*. 1982の舞台写真
- 71 "Teater; Electric 'Extremities' and a Muffles 'Alice'" *New York Times* 1983年1月2日号
- 72 "A Grande Dame Returns as White Queen" *New York Times* 1982年12月19日号
- 73 <http://www.playbillvault.com/Show/Detail/5247/Alice-in-Wonderland>
- 74 "Stage: Tenniel's 'Alice' at the Virginia Theater" *New York Times* 1982年12月24日号
- 75 同上
- 76 同上
- 77 "WNET Losing Gamble as an Angel for 'Alice'" *New York Times* 1982年12月31日号
- 78 "Teater; Electric 'Extremities' and a Muffles 'Alice'" *New York Times* 1983年1月2日号
- 79 <http://www.playbillvault.com/Show/Detail/5247/Alice-in-Wonderland>
- 80 "New York Day by Day: Awake in Wonderland" *New York Times* 1983年9月23日号
- 81 Sheehy, Helen *Eva Le Gallienne: A Biography* Knopf pp.444-445 1996
- 82 Playbill: *Alice in Wonderland*. 1982
- 83 <http://www.tv.com/shows/great-performances/alice-in-wonderland-1336956/>
- 84 Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York, p.47, 1953

---

85 同上。

86 Playbill: *Alice in Wonderland*. 1982

87 "WNET Losing Gamble as an Angel for 'Alice'" *New York Times* 1982年12月31日号

88 "New York Day by Day: Awake in Wonderland" *New York Times* 1983年9月23日号

89 同上

90 "TV: 'Alice in Wonderland' and New CBS Series" *New York Times* 1983年10月3日号

91 同上

92 Le Gallienne, Eva. *With a Quiet Heart: An Autobiography*. The Viking Press, New York, p.47, 1953

93 Le Gallienne, Eva. Forward to *Alice in Wonderland: Adapted for the Stage*. Samuel French, 1960. 1948年の改訂版に付された前書きであり、1977年版にも同一の記述がある。